

THE TEACHING OF JESUS CHRIST

IN HIS OWN WORDS

Compiled by

THE EARL OF NORTHBROOK

東京

基督教書類會社

基督の教訓

ノースブルック卿編集

253

256

No. 147

第七十四頁

020568-000-2

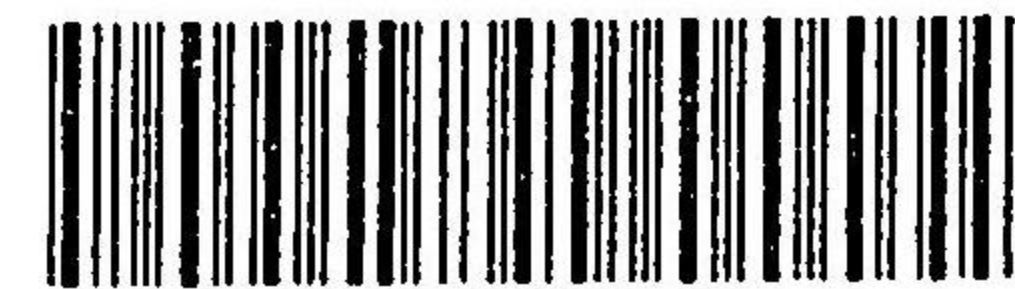
特61-244

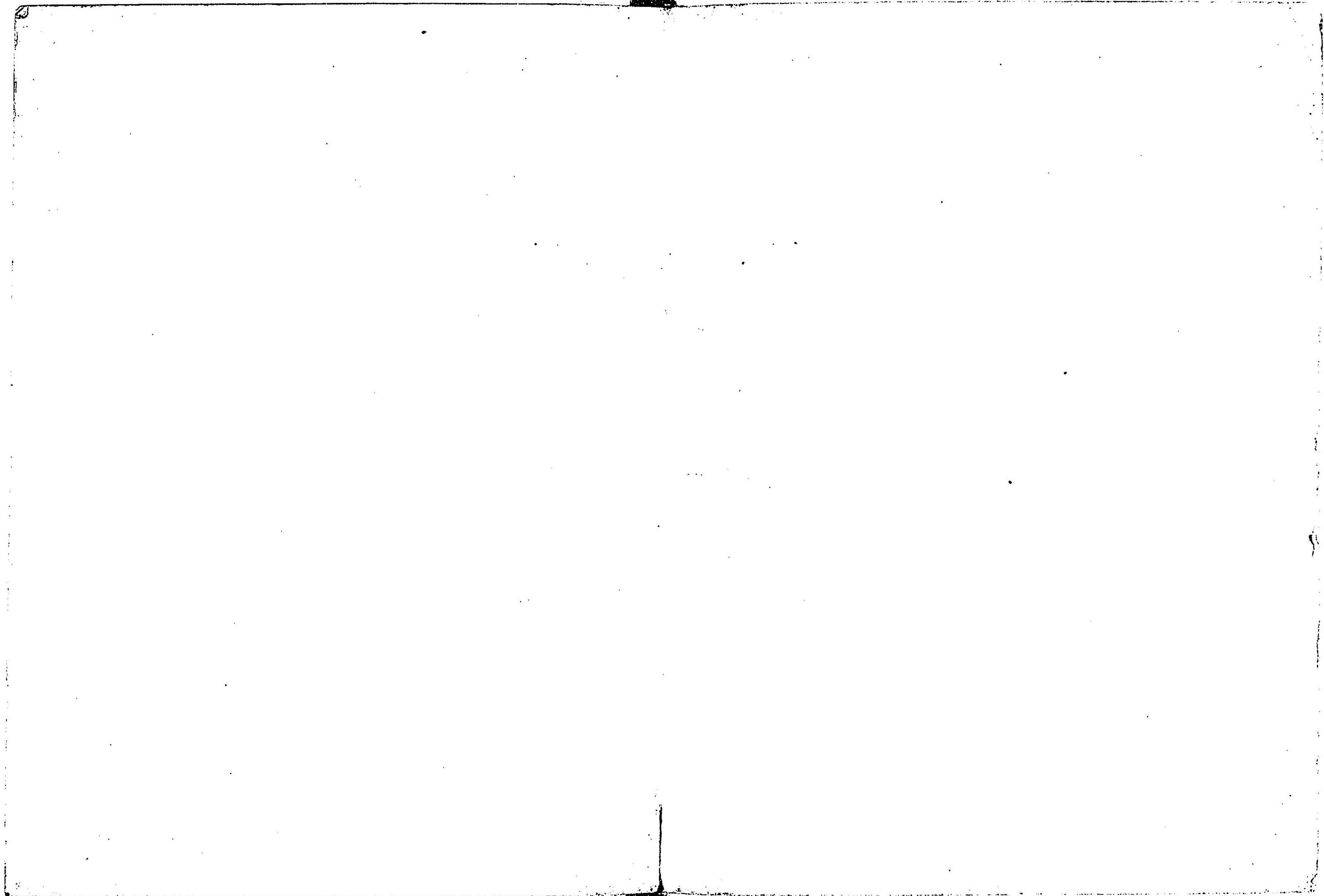
基督の教訓

ノースブルック卿/編

M39

ABI-0382





特 61
244

THE TEACHING OF JESUS CHRIST

IN HIS OWN WORDS

Compiled by

THE EARL OF NORTHBROOK

基督の教訓

ノースブルック卿編纂

東京

基督教書類會社

明治

39 9 10

内交

No. 147

號七十四百第

譯者緒言

本書は印度の宗教事情に通じたるノースブルーク卿が
摘録したるものなるが宗教事情に於て彼の國と我が國と
よく似たるものあれば彼に効用ある如く、我にも効用の
顯著なるべきを信じ、さては翻譯することゝなれり。

文體は既に我が國に直譯せられたる聖書のものと同じ
からず、蓋し我が直譯聖書は日本的になさんとか、主
格、賓格等の代名詞を省きしもの多く、或は言語の位地
を變じて原文よりも意味を強くし、又弱くしたる點あり
て誤解し易き恐あらんかとして之れを避けたるなり、要す
るに希臘の言文に於ては句の冒頭にある語最も重く、次

は句末、次に中位の順序によるものと知るべし。

原編纂者は英改正譯を取りたれば譯者は出來得る限原

文に基き、同時に幾分を談話的に改めたり、ぎこちなさ

所、又全く談話的になさゞりし所あるは原義を誤らんこ

とを恐れしと、餘り野卑に流れざるやうにと思ひてなり。

主の御口より出でたるものは五號活字を用ゐしが其の

他は六號活字を用ゐたり、譯者が句中に括弧を用ゐて數

語を加へたるものあり、右は原文に意ありて語を省きし

ものにて、其の儘譯出せば意の解し難きと口調の面白か

らぬものあればなり。

出典には略字を用ゐたれば左に本書所掲の略字解を記

しおけり、

創 は舊約創世記、

申 は舊約申命記、

詩 は舊約詩篇、

賽 は舊約以賽亞書、

太 は新約馬太傳、

可 は新約馬可傳、

路 は新約路加傳、

約 は新約約翰傳、

徒 は新約使徒行傳、

羅 は新約羅馬書、

哥前 は新約哥林多前書、

弗 は新約以弗所書、

腓 は新約腓立比書、

西 は新約哥羅西書、

撒前 は新約帖撒羅尼迦前書、

提前 は新約提摩多前書、

雅 は新約雅各書、

彼前 は新約彼得前書、

譯者緒言

壹約は新約約翰第一書、

明治卅九年四月

三浦徹

四

目錄附出典

第一章 神

- 申六〇四、
- 太四〇十、
- 太廿三〇九、
- 路四〇八、
- 約一〇十八、
- 壹約四〇八、
- 申六〇五、
- 太七〇十一、
- 可十二〇廿九、
- 路十〇廿七、
- 約四〇廿四、
- 申六〇十三、
- 太廿二〇卅七、
- 可十二〇卅、
- 路十一〇十三、
- 徒十七〇廿四、廿八、

一頁

第二章

基督の自證

- (い) 基督と神との一致
- 太十一〇廿七、
- 約五〇廿三、
- 約十四〇九、十一
- 路十〇廿二、
- 約十〇卅、
- 約五〇十九、廿一、
- 約十二〇四十四、四十五、

四

目錄附出典

一

(ろ)基督の無罪

キリスト

約八〇廿九、

約八〇四十六

約十五〇十、

七

彼前二〇廿一、廿二、

壹約三〇五、

(は)基督の貧賤

キリスト

太八〇廿、

路九〇五十八、

八

(二)神の子

約九〇卅五、卅七、

八

(二)メシヤ(基督)

キリスト

太十六〇十三、十七、

太廿六〇六十三、

可八〇廿九、

九

路九〇廿、

約四〇廿五、廿六、

第三章 基督の性質

キリスト

(一)基督の職任

キリスト

賽六十一〇一、二、

太九〇六、

太十一〇五、六、

二

太廿八〇十八、

可二〇十、

路四〇四十三、

路五〇廿四、

路四〇十八、廿一、

約三〇十六、十七、

約五〇卅六、

路七〇廿二、廿三、

約六〇卅九、四十、

約七〇十六、十七、

約六〇卅八、

約十二〇四十九、五十、

約十四〇廿四、

約十〇廿五、

(二)途、眞、生命

約八〇卅一、卅二、

約十四〇六、

約十八〇卅七、

六

(三)世の光

約一〇四、

約三〇十八、廿一、

約八〇十二、

七

約九〇五、

約十二〇卅五、卅六、

約十二〇四十六、

壹約一〇三、九、

(四)門

約十〇七、九、十、

二〇

(五)善牧者

詩廿三篇、

約十〇十四、十六、

約十〇廿七、廿九、

二〇

第四章 基督の死……………三

太廿〇十八、十九 太廿六〇二、

可八〇卅一、 可九〇卅一、 可十〇卅三、卅四、

可十〇四十五、 路九〇廿二、四十四、 路十八〇卅二、卅三、

約十〇十七、十八、 約十二〇廿三、廿四、 彼前三〇十八、

壹約二〇一、二、

最後の聖言……………二六

詩廿二〇一、 詩卅一〇五、 太廿七〇四十六、

可十五〇卅四、 路廿三〇卅四、 路廿三〇四十六、

約十九〇卅、

第五章 基督の昇天……………二七

約廿〇十七、

第六章 基督の消息(福音、即ち吉報)……………二七

(一)父の愛……………二七

(い)喪はれし羊……………二七

太十八〇十三、十三 太十八〇十四、 路十五〇四〇七、

(ろ)失はれし貨幣……………二九

路十五〇八〇十、

(は)放蕩息子……………三〇

路十五〇十一〇廿四、

(二)救主の招待……………三三

太九〇十二、十三、 太十一〇廿八〇卅、 可二〇十七、

路五〇卅一、卅二、 路十九〇十、 約六〇卅七、

第七章 神の國……………三四

太四〇十七、 可一〇十五、 路十七〇廿、廿一、

約十八〇卅六、 羅十四〇十七、十八、

(い)隠れし財寶……………三五

太十三〇四十四、

(ろ) 價貴き眞珠……………三六

太十三〇四十五、四十六、

神の國に入る方法……………三六

(い) 新生……………三六

太十一〇廿五、廿六、

太十八〇一四、

太十九〇十三、十五、

可九〇卅四、卅七、

可十〇十三、十六、

路九〇四十六、四十八、

路十〇廿一、

路十八〇十五、十七、

約三〇三、五、八、

(ろ) 窄門……………三九

太七〇十三、十四、

路十三〇廿四、

(は) 犁……………四〇

路九〇六十二、

第八章 神の國の祝福……………四〇

太五〇三、十二、

路六〇廿、廿三、

路十一〇廿八、

約廿〇廿九、

徒廿〇卅五、

第九章 神の國の責任……………四二

(二) 愛……………四三

利十九〇十八、

太五〇四十三、四十八、

太七〇一、五、

太七〇十二、

太廿二〇卅九、

可四〇廿四、

可十二〇卅一、

路六〇廿七、廿八、卅二、

路六〇卅一、

路六〇卅六、卅八、四十二、

四十二、

路十〇廿七、

約十三〇卅四、卅五、

羅十三〇八、九、

哥前十三章、

西三〇十二、十四、

彼前三〇八、九、

壹約四〇七、

(い) 親愛のサマリヤ人……………四九

路十〇卅、卅七、

(ろ) 苛酷の僕……………五一

太十八〇廿一、卅五、

路十七〇三、四、

(二) 謙讓……………五四

太廿〇廿六、廿八、

太廿三〇十二、

可九〇卅五、

可十〇四十三、四十五、

路九〇十一、

路九〇四十八、

路十四〇八〇十二、路廿二〇廿六、廿七、約十三〇三〇五、十二〇十七、雅四〇六、彼前五〇五、

(三)克己……………五七

太十〇卅七、太十〇卅八、卅九、太十六〇廿四〇廿六、

可八〇卅四〇卅八、路九〇廿三〇廿六、約十二〇廿五、廿六、

若き宰……………五九

太十九〇十六〇廿六、可十〇十七〇廿七、路十八〇十八〇廿七、

提前六〇六〇十、十七〇十九、

(四)基督に對する敬虔……………六三

ベタニヤに於る奉事……………六二

太廿六〇六〇十三、可十四〇三〇九、約十二〇一〇八、

(五)祈禱……………六四

太六〇五〇八、太七〇七〇十二、太廿六〇四十一、

可十四〇卅八、路十一〇九〇十三、路廿二〇四十六、

主の祈禱……………六六

太六〇九〇十三、太六〇十四、十五、可十一〇廿五、廿六、

路十一〇二〇四、腓四〇六、七、

(六)斷食……………六六

太六〇十六〇十八、

(七)施濟……………六六

太五〇四十二、太六〇一〇四、太六〇廿一、

路六〇卅一、卅三〇卅六、路十二〇卅三、卅四、摩約三〇十七、十八、

寡婦のミヌタ……………七

可十二〇四十一〇四十四、路廿一〇一〇四、

(八)接客……………七

路十四〇十二〇十四、

(九)言語……………七

太五〇卅三〇卅七、太十二〇卅三、卅七、路六〇四十四、四十五、

弗四〇廿九、卅一、卅二、 雅一〇廿六、 雅三〇二一、十、

(十)柔順……………七

太十二〇四十六、五十、 可三〇卅一、卅五、 路八〇十九、廿一、

(十一)善行……………六

路十七〇七、十、

第十章 訓戒……………七

(一)怒……………七

太五〇廿一、廿六、 路十二〇五十八、五十九、

復讐……………八

太五〇卅八、四十一、 路六〇廿九、

(二)色慾……………八

太五〇廿七、廿八、

離婚……………八

創二〇廿四、 太五〇卅一、卅二、 太十九〇四、六、

太十九〇九、 可一〇六、九、 可一〇十一、十二、

路十六〇十八、

(三)貪婪……………八

太六〇十九、廿四、 太六〇廿五、卅四、 路十二〇十五、

路十二〇廿二、卅一、 路十六〇十、十一、十三、

富有の愚人……………七

路十二〇十六、廿一、

(四)自義……………八

パリサイ人と税吏……………八

太廿三〇十二、 路十四〇十一、 路十八〇九、十三、

路十八〇十四、

(五)虚禮……………九

太十五〇十一、廿、 可七〇一、廿三、

(六) 偽善……………路十二〇一―三、
 太十〇廿六、廿七、可四〇廿二、路十二〇一―三、
 (七) 實行と無實……………路十二〇一―三、
 (イ) 播種者と種、附説明……………路十三〇三―八、及び十三〇十九―廿三、
 可四〇三―八、及び四〇十五―廿、
 路八〇五―八、及び八〇十一―十五、
 (ロ) 二人の子……………太廿一〇廿八―卅一、
 (ハ) 磐上の家と基礎なき家……………太七〇廿四―廿七、
 路六〇四十六―四十九、
 第十一章 基督教徒の生活……………太五〇十三、
 太五〇十四―十六、太六〇廿二、廿三、
 太十〇十六、可四〇廿一、可九〇五十、

路八〇十六、路十一〇卅三、路十一〇卅四、卅五、
 羅十二〇八―廿一、撒前五〇十四―廿二、提前四〇七、八、
 第十二章 基督との一致(基督と信者との關係)……………約十五〇一―八、
 (一) 眞の葡萄樹……………約四〇十四、
 約六〇廿七―廿九、約六〇卅三、
 約六〇卅五、約六〇五十一、約六〇六十三、
 (二) 生命のパンと水……………約七〇卅七―卅九、
 第十三章 神の國の組織……………(一) パプデスマ……………太廿八〇十九、
 (二) 主の晩餐……………太廿六〇廿六、廿八、可十四〇廿二―廿四、
 路廿二〇十九、廿、

第十四章 末日の審判 一〇七

哥前十一〇廿三、廿五、哥前十一〇廿六、
太七〇十七、廿三、太十〇卅二、卅三、
太廿四〇卅一、

太廿四〇卅六、四十二、五十一、
太廿五〇卅一、四十六、

可十三〇廿六、廿七、可十三〇卅二、卅六、
路十二〇八、九、

路十二〇卅九、四十八、約五〇廿四、廿九、
約十一〇廿五、廿六、

(イ) 畑の稂莠、附説明 一五

太十三〇廿四、卅、及び十三〇卅七、四十三、

(ろ) 網 一七

太十三〇四十七、五十、

(は) 十人の處女 一八

太廿五〇一、十三、

(に) 葡萄園の農夫 二〇

太廿〇一、十六、

(は) マレント 二三

太十三〇十二、

太廿五〇十四、卅、
路十九〇十二、廿六、

第十五章 天 二六

太廿二〇卅、

可十二〇廿五、

路廿〇卅四、卅六、

約十四〇一、二、

第十六章 最後の獎勵 二七

約十四〇十五、廿一、廿三、廿四、

約十四〇廿七、廿八、

約十五〇七、十四、
約十五〇廿、

約十六〇廿八、

第十七章 最後の祈禱 三一

太廿六〇卅九、

可十四〇卅六、

路廿二〇四十二、

約十七章、

第十八章 聖靈 三六

約十四〇十六、

約十四〇廿六、

約十五〇廿六、

約十六〇七、十三、十五、徒一〇五、七、八、

壹約三〇廿一、廿四、

第十九章 福音の傳播……………一四二

(イ)芥子種……………一四二

太十三〇卅一、卅二、可四〇卅一、卅二、路十三〇十九、

(エ)麴醱……………一四二

太十三〇卅三、路十三〇廿、廿一、

(ハ)約束……………一四二

太十〇四十、太十八〇廿、太廿四〇十四、

太廿八〇十九、廿、可九〇卅七、可十三〇十、

路九〇四十八、路十〇十六、路十三〇廿九、

路廿四〇四十六、四十七、約十二〇卅二、約十三〇廿、

目錄附出典終

基督の教訓

第一章 神

可十二〇 申六〇四 我儕の神は即ち一の主。

太廿三〇 爾曹の父は獨一にして天に在す。

太四〇十 路四〇十八 申六〇三 爾主なる爾の神を拜し、之れにのみ事へよ。

約四〇廿 神は靈である、之れを拜する者は靈と眞とに於て拜さ

なければならぬ。

太廿二〇
可廿七〇
路十〇廿

心のあらん限、精神のあらん限、意のあらん限、力の
あらん限、爾の神なる主を愛せよ。

太七〇十
路十一〇

爾曹は悪き者ながら善賜を其の子に與ふるを知つて居
る、況して爾曹の天の父は自己に求むる者に善物を與へ
たまはざることがあらうか。

神を見たものはいまだあらぬ、父の國に在す獨子こそこれを説示し
たまふたのである。(約一〇十八、ヨハ子の語)

神は愛である。(壹約四〇八、ヨハ子の語)

それ宇宙と其の中の萬物を造りたまふた神は天地の主であるので、
人工で造つた神殿等に住みたまふことは無い、衆人に生命、氣息、其
他の萬物を與へたまふもので、彼は何物をも要せざれば人工をもて
事へらるゝものでない、此の神は衆人を一の家族より造つて地の全面
に住ませ、前以て(彼等の)時と住むべき處とを定めたまふた、然れ
ば彼等は神に往くべき道を揣摩り、又神を見出ださんとして神を求むる
ことができる、神は我儕の各人から遠く距たりては在さぬからである、
我儕が生き、動き又あるは神による。(徒十七〇廿四、廿八、パウロの
語)。

第二章 基督の自證

(5) 基督と神との一致

約十〇廿、
我と父とは一である。

約十二〇四十四、
約十五、
我を信する者は我を信するのではなく、我を遣はし、者を(信する)のである。我を見る者は我を遣はし、者を見るのである。

約五〇廿三、
此の子を敬はぬ者は之れを遣はし、父を敬はぬのである。

る。

路十〇廿二、
太十一〇廿七、
凡ての物は我が父より我に與へられた、父の外にはこの子の誰なるかを識る者なく、子と子の啓示するもの、外にこの父の誰なるかを識る者は無い。

約十四〇九、
約十、
我を見たものは父をも見たのである。……父は我に居りて其の業を爲したまふ。我は父に居り、又父は我に居たまふを信せよ、然らずば其の業の爲に我を信せよ。

約五〇廿一、
子は自ら何事をも爲すことはできぬ、たゞ父の爲した

まふのを見て(爲す)のみである、何事にかぎらず父の爲したまふ所は子も亦同じく之れを爲すからである。抑父は子を愛し、自ら爲せる一切を之れに示したまふ、爾曹を怪しませんとて此等よりも大なる業を之れに示したまふであらう。父が死者を起たせて彼等を活かしたまふ如く子も亦好む者を活かす。

因に云ふ、「此等よりも」とは主が此の少し前に長らく病床にあつた者を癒し、又後には死者を甦らせたまふことがあるのでかくいはれたのである。

(ろ) 基督の無罪

約八〇廿九。

我を遣はしたまふた者は我と偕に居たまふ、彼は我を單獨にて遺置きたまふことはない、我は常に彼の嘉する所のことを爲すからである。

約八〇四十六。

爾曹の中に我を罪ありとする者があるか。

約十五〇十。

我は我が父の誠命を守つた。

彼には罪があらぬ。(一約三〇五、ヨハ子の語)

基督は又爾曹が其の跡に則るやうにとて摸範を爾曹に遺し、爾曹の爲に苦を受けたまふた、彼は罪を犯さず、其の口に詭譎はなかつた。
 (彼前二〇廿一、廿二、ペテロの語)。

(は)基督の貧賤

太八〇五
 路九〇五

狐には穴がある、天空の鳥には巢がある、然も人の子には其の首をおく處がない。

(二)神の子

約九〇卅
 五〇七

耶穌は……(視力を回復したまふた盲者に) いひたまふた、爾神の子を信ずるか。
 彼は答へていふた、そは誰であらうか、主よ、我は彼を信ぜんとす。

耶穌は彼にいひたまふた、爾はわれを見た、爾と語つて居るは其の者である。

(二)メシヤ(基督)

約四〇廿
 五〇六

かの婦人は彼にいふた、我はメシヤ(基督といはる)の來りたまふことを知る、其の來る時萬事を我儕に告げたまふであらう。
 彼女は彼にいふ、

爾に語居る我は彼である。

第二章 基督の自證

因ちなみにいふ、「メシヤ」は基督キリスト、即ち「受膏者」と同じ意いみ。

太十六〇
十三〇
可八〇廿
路九〇廿

耶穌イエスは弟子等に問ひたまふた……爾曹なんぢらは我を誰たれであるといふか。シモン、ペテロは答へていふた、爾なんぢは活ける神の子、基督キリストにて在すと。

耶穌は答へて彼にいひたまふた、

福さいはひなる哉かな、爾なんぢシモン、血肉けつにくがこれを爾なんぢに示しめしたのではなく、天てんに在いますわが父ちちである。

太廿六〇
六十三

祭司さいしの長をさは彼かれにいふた、我われは活ける神によつて爾なんぢに命めいす、爾なんぢ神の子なる彼かの基督キリストなるかを云へ、耶穌イエス彼かれにいふ、爾なんぢのいふたごと如くである。

第三章

基督の性質

(一) 基督の職任

約六〇卅
八

我われは天てんより降くだつた、我われが意こころを行なさんとではなく、我われを遣つかはしたまふた者の聖意みこころを行なさんとするにある。

約十二〇
四十九
五十九

我われが言いふべき所ところ、わが語かたるべき所ところは我われを遣つかはしたまふ父ちちが我われに命めい令れいを與あたへたまふたのである。我われは其その命めい令れいが永かぎりなき生いのちであるを知る、故ゆゑにわが語かたる所ところは父ちちの我われに語かたり

第三章 基督の性質

たまふた如く、かく我は語る。

路四〇四
十三

神の國の福音を宣傳へなければならぬ、……これが爲に我は遣はされたからである。

約七〇十
約七〇六
約七〇七
約七〇八
約七〇九
約七一〇
約七一一
約七一二
約七一三
約七一四
約七一五
約七一六
約七一七
約七一八
約七一九
約七二〇
約七二一
約七二二
約七二三
約七二四
約七二五
約七二六
約七二七
約七二八
約七二九
約七三〇
約七三一
約七三二
約七三三
約七三四
約七三五
約七三六
約七三七
約七三八
約七三九
約七四〇
約七四一
約七四二
約七四三
約七四四
約七四五
約七四六
約七四七
約七四八
約七四九
約七五〇
約七五一
約七五二
約七五三
約七五四
約七五五
約七五六
約七五七
約七五八
約七五九
約七六〇
約七六一
約七六二
約七六三
約七六四
約七六五
約七六六
約七六七
約七六八
約七六九
約七七〇
約七七一
約七七二
約七七三
約七七四
約七七五
約七七六
約七七七
約七七八
約七七九
約七八〇
約七八一
約七八二
約七八三
約七八四
約七八五
約七八六
約七八七
約七八八
約七八九
約七九〇
約七九一
約七九二
約七九三
約七九四
約七九五
約七九六
約七九七
約七九八
約七九九
約八〇〇
約八〇一
約八〇二
約八〇三
約八〇四
約八〇五
約八〇六
約八〇七
約八〇八
約八〇九
約八一〇
約八一一
約八一二
約八一三
約八一四
約八一五
約八一六
約八一七
約八一八
約八一九
約八二〇
約八二一
約八二二
約八二三
約八二四
約八二五
約八二六
約八二七
約八二八
約八二九
約八三〇
約八三一
約八三二
約八三三
約八三四
約八三五
約八三六
約八三七
約八三八
約八三九
約八四〇
約八四一
約八四二
約八四三
約八四四
約八四五
約八四六
約八四七
約八四八
約八四九
約八五〇
約八五一
約八五二
約八五三
約八五四
約八五五
約八五六
約八五七
約八五八
約八五九
約八六〇
約八六一
約八六二
約八六三
約八六四
約八六五
約八六六
約八六七
約八六八
約八六九
約八七〇
約八七一
約八七二
約八七三
約八七四
約八七五
約八七六
約八七七
約八七八
約八七九
約八八〇
約八八一
約八八二
約八八三
約八八四
約八八五
約八八六
約八八七
約八八八
約八八九
約八九〇
約八九一
約八九二
約八九三
約八九四
約八九五
約八九六
約八九七
約八九八
約八九九
約九〇〇
約九〇一
約九〇二
約九〇三
約九〇四
約九〇五
約九〇六
約九〇七
約九〇八
約九〇九
約九一〇
約九一一
約九一二
約九一三
約九一四
約九一五
約九一六
約九一七
約九一八
約九一九
約九二〇
約九二一
約九二二
約九二三
約九二四
約九二五
約九二六
約九二七
約九二八
約九二九
約九三〇
約九三一
約九三二
約九三三
約九三四
約九三五
約九三六
約九三七
約九三八
約九三九
約九四〇
約九四一
約九四二
約九四三
約九四四
約九四五
約九四六
約九四七
約九四八
約九四九
約九五〇
約九五二
約九五三
約九五四
約九五五
約九五六
約九五七
約九五八
約九五九
約九六〇
約九六一
約九六二
約九六三
約九六四
約九六五
約九六六
約九六七
約九六八
約九六九
約九七〇
約九七一
約九七二
約九七三
約九七四
約九七五
約九七六
約九七七
約九七八
約九七九
約九八〇
約九八一
約九八二
約九八三
約九八四
約九八五
約九八六
約九八七
約九八八
約九八九
約九九〇
約九九一
約九九二
約九九三
約九九四
約九九五
約九九六
約九九七
約九九八
約九九九
約一〇〇〇

わが教道は我のにあらず、我を遣はしたまひし者の教道である。若し人が其の聖意を爲さんと欲せば此の教道が神よりのものか、或は我より我が語るものかを知るであらう。

賽六十一
二〇

主の靈は我に宿る。

路四〇十
一八
二〇

彼は貧者に福音を宣べさせんとて我に膏を注ぎたまふた、

彼は俘虜に放釋を告げさせんとて我を遣はし、

瞽者に見ることを得させ、

壓抑せらるゝ者等を自由にさせ、

主の禧年を告げさせ、

……今日此の聖書は爾曹の耳にせる如く應せられた。

約五〇卅
約五〇六
約五〇七
約五〇八
約五〇九
約五一〇
約五一一
約五一二
約五一三
約五一四
約五一五
約五一六
約五一七
約五一八
約五一九
約五二〇
約五二一
約五二二
約五二三
約五二四
約五二五
約五二六
約五二七
約五二八
約五二九
約五三〇
約五三一
約五三二
約五三三
約五三四
約五三五
約五三六
約五三七
約五三八
約五三九
約五四〇
約五四一
約五四二
約五四三
約五四四
約五四五
約五四六
約五四七
約五四八
約五四九
約五五〇
約五五一
約五五二
約五五三
約五五四
約五五五
約五五六
約五五七
約五五八
約五五九
約五六〇
約五六一
約五六二
約五六三
約五六四
約五六五
約五六六
約五六七
約五六八
約五六九
約五七〇
約五七一
約五七二
約五七三
約五七四
約五七五
約五七六
約五七七
約五七八
約五七九
約五八〇
約五八一
約五八二
約五八三
約五八四
約五八五
約五八六
約五八七
約五八八
約五八九
約五九〇
約五九一
約五九二
約五九三
約五九四
約五九五
約五九六
約五九七
約五九八
約五九九
約六〇〇
約六〇一
約六〇二
約六〇三
約六〇四
約六〇五
約六〇六
約六〇七
約六〇八
約六〇九
約六一〇
約六一一
約六一二
約六一三
約六一四
約六一五
約六一六
約六一七
約六一八
約六一九
約六二〇
約六二一
約六二二
約六二三
約六二四
約六二五
約六二六
約六二七
約六二八
約六二九
約六三〇
約六三一
約六三二
約六三三
約六三四
約六三五
約六三六
約六三七
約六三八
約六三九
約六四〇
約六四一
約六四二
約六四三
約六四四
約六四五
約六四六
約六四七
約六四八
約六四九
約六五〇
約六五一
約六五二
約六五三
約六五四
約六五五
約六五六
約六五七
約六五八
約六五九
約六六〇
約六六一
約六六二
約六六三
約六六四
約六六五
約六六六
約六六七
約六六八
約六六九
約六七〇
約六七二
約六七三
約六七四
約六七五
約六七六
約六七七
約六七八
約六七九
約七八〇
約七八一
約七八二
約七八三
約七八四
約七八五
約七八六
約七八七
約七八八
約七八九
約七九〇
約七九一
約七九二
約七九三
約七九四
約七九五
約七九六
約七九七
約七九八
約七九九
約八〇〇
約八〇一
約八〇二
約八〇三
約八〇四
約八〇五
約八〇六
約八〇七
約八〇八
約八〇九
約八一〇
約八一一
約八一二
約八一三
約八一四
約八一五
約八一六
約八一七
約八一八
約八一九
約八二〇
約八二一
約八二二
約八二三
約八二四
約八二五
約八二六
約八二七
約八二八
約八二九
約八三〇
約八三一
約八三二
約八三三
約八三四
約八三五
約八三六
約八三七
約八三八
約八三九
約八四〇
約八四一
約八四二
約八四三
約八四四
約八四五
約八四六
約八四七
約八四八
約八四九
約八五〇
約八五一
約八五二
約八五三
約八五四
約八五五
約八五六
約八五七
約八五八
約八五九
約八六〇
約八六一
約八六二
約八六三
約八六四
約八六五
約八六六
約八六七
約八六八
約八六九
約八七〇
約八七一
約八七二
約八七三
約八七四
約八七五
約八七六
約八七七
約八七八
約八七九
約八八〇
約八八一
約八八二
約八八三
約八八四
約八八五
約八八六
約八八七
約八八八
約八八九
約八九〇
約八九一
約八九二
約八九三
約八九四
約八九五
約八九六
約八九七
約八九八
約八九九
約九〇〇
約九〇一
約九〇二
約九〇三
約九〇四
約九〇五
約九〇六
約九〇七
約九〇八
約九〇九
約九一〇
約九一一
約九一二
約九一三
約九一四
約九一五
約九一六
約九一七
約九一八
約九一九
約九二〇
約九二一
約九二二
約九二三
約九二四
約九二五
約九二六
約九二七
約九二八
約九二九
約九三〇
約九三一
約九三二
約九三三
約九三四
約九三五
約九三六
約九三七
約九三八
約九三九
約九四〇
約九四一
約九四二
約九四三
約九四四
約九四五
約九四六
約九四七
約九四八
約九四九
約九五〇
約九五二
約九五三
約九五四
約九五五
約九五六
約九五七
約九五八
約九五九
約九六〇
約九六一
約九六二
約九六三
約九六四
約九六五
約九六六
約九六七
約九六八
約九六九
約九七〇
約九七一
約九七二
約九七三
約九七四
約九七五
約九七六
約九七七
約九七八
約九七九
約九八〇
約九八一
約九八二
約九八三
約九八四
約九八五
約九八六
約九八七
約九八八
約九八九
約九九〇
約九九一
約九九二
約九九三
約九九四
約九九五
約九九六
約九九七
約九九八
約九九九
約一〇〇〇

父が成遂げんとて我に賜ふた事業、父の名に於て我が爲す所の其の事業は父が我を遣はしたまふたことをわが爲に證する。

太十一〇
五、六〇
路七〇廿
三〇

瞽者は其の視力を得、跛者は歩み、癩者は浄められ、聾者は聞き、死者は甦され、貧者は福音を聴かせられた、福なる哉、我に躓く機なき者は。

太廿八〇
十八〇

天の中、地の上、一切の権は我に與へられた。

人の子は地の上に罪を赦すの権がある。

太九〇〇六
可二〇〇六
路五〇〇廿
四〇

是は我を遣はしたまふた者の聖意である、(即ち)凡て我に與へたまふた者を我は孰れをも失はず、末日に是れを

約六〇卅
九、四

復活らす。是は我が父の聖意である、(即ち)子を見て、之れを信する者は皆永生を得、且つ我は末日に彼を復活らすであらう。

抑く神の世の人を愛したまふは其の生きたまひし獨子をさへ與へたまひしほどにて、凡て彼を信する者に洗滌びすして、却て永生を得せしめんとしたまふのである。神が其の子を世に遣はしたまふたのは世を審判かん爲ではなく、却て世をして彼によりて救はれしめん爲のみである。(約三〇十六、十七、ヨハ子の語)

我儕は父が世の救主として其の子を遣はしたまふたことを見て證するるのである、(壹約四〇十四、ヨハ子の語)

(二) 途、眞、生命

約十四〇
六、 我は途であり、眞であり、生命である、我に由らば誰とて父に臻る者は無い。

約八〇
二、 卅 若し爾曹我が言に居らば爾曹は眞に我が弟子である、爾曹眞理を知る、而して眞理は爾曹を自由ならしむ。

約十八
卅七、 我はこれが爲に生まれ、又これが爲に世に来つた、眞理に證を爲さんとてゐる、眞理に屬く者は凡て我が聲

を聞く。

(三) 世の光

約十二
四十六、 我は光として世に臨つた、凡て我を信する者の暗冥に留らぬやうにとてゐる。

約九〇
五、 約八〇
十、 我が世にある時は我世の光である。我に従ふ者は暗冥に歩まずして生命の光を得る。

約十二
卅五、 卅六、 片時光は爾曹の中にある、暗冥が爾曹に追及かざるや

爾曹光のある間に歩め、暗冥中に歩く者は己が往く所を知らぬ、爾曹光ある間に光の子等となるやう光を信せよ。

彼の裏に生命があつた、此の光は人々の光である。(約一〇四、ヨハ子の語)。

彼を信する者は審判かれず、信ぜざる者は己に審判かれたのである。如何となれば彼は神の獨子の名を信ぜざるからである。是は即ち審判である、光は己に世に来つたのに人々光よりも寧ろ暗黒を好んだ、是れ其の行爲が悪くからである。惡を爲す者は凡て光を憎んで、其の行爲責められざるやう光に来らぬ、然し眞理を踐行ふ者は其の行爲神に

於て成つたものであるから、其の顯れん爲に(光に来る)。(約三〇十八、廿一、ヨハ子の語)。

我儕の交通は父及び其の子耶穌、基督と同心たることである。……神は光であり、其の裏に少しも暗黒がないとは我儕が彼よりきつて爾曹に傳ふる消息である。若し我儕神との交通があるといつて、尙ほ暗黒に歩くなら我儕は偽者であつて眞理を行ふ者でない、然し若し我儕が彼の光にある如く光の中に歩くならば我儕は互に交通を爲して居るので、其の子耶穌の血は凡ての罪から我儕を潔むる。若し我儕が罪はないといふなら我儕は自ら欺くので、眞理は我儕の裏にあらぬ。若し我儕罪を告白せば神は忠實で且つ義く、我儕の罪を赦し、凡ての不義から我儕を潔めたまふ。(壹約一〇三、九、ヨハ子の

語(ことば)

(四) 門

約十〇七、九、十

我(われ)は羊(ひつじ)の門(もん)である、……若(も)し人(ひと)我(われ)によつて入(い)るならば救(すく)はれ、(自由(じゆう)に)出(で)入(いり)して牧場(まきば)を得(う)る。盗人(ぬすびと)は竊(ぬす)まん、殺(ころ)さん、滅(ほろ)さんの外來(ほかきた)らぬ、我(われ)は羊(ひつじ)が生命(いのち)を得(え)、又(また)豊(ゆたか)に之(これ)を得(う)るやうにとて來(きた)つたのである。

(五) 善牧者

約十〇六、四、十

我(われ)は善牧者(よきひつじかひ)である、我(われ)は我(われ)の羊(ひつじ)を識(し)り、われ(われ)の羊(ひつじ)は我(われ)を識(し)る、恰(あた)か父(ちち)が我(われ)を識(し)り、我(われ)が父(ちち)を識(し)るやうである、我(われ)は羊(ひつじ)の爲(ため)に我(われ)が生命(いのち)を捐(す)つる。他(た)に我(われ)は羊(ひつじ)を有(も)つ、そは此(こ)の牢(ろう)のではあらぬ、彼等(かれら)をも我(われ)は引來(ひききた)らねばならぬ、彼等(かれら)は我(われ)が聲(こゑ)をき、而(しか)して一(ひとつ)の牢(ろう)、一(ひとつ)の牧者(ぼくしや)あるに至(いた)る。

約十〇九、七、廿

我(われ)が羊(ひつじ)は我(われ)が聲(こゑ)をき、我(われ)は彼等(かれら)を識(し)り、彼等(かれら)は我(われ)に從(したが)ふ、我(われ)は永生(えいせい)を彼等(かれら)に與(あた)ふ、彼等(かれら)はいつまでも滅(ほろ)びず、誰(たれ)とて我(われ)が手(て)より彼等(かれら)を奪(うば)ふものはあらぬ。之(これ)を我(われ)に與(あた)へたまへる我(われ)が父(ちち)は凡(すべ)てのものよりも大(おほ)なるものであ

る、誰とて父の手より彼等を奪ひ得る者はあらぬ。

エホバは我の牧者なり、われ乏しきことあらじ。

彼は我を緑の野にふさせ、

彼は我をいこひの水濱にみるびきたまふ。

彼は我が靈魂をいかし、

彼は我を御名のゆるなをもて義しき途に導きたまふ。

たとひ我死の陸の谷を歩むとも、

我は禍災をおそれじ、爾我と借に在せばなり。

爾の笞、爾の杖、これぞ我を慰むる。

爾わが仇の前に我が爲に筵をまうけ、

わが首に膏をそそぎ、わが酒杯はあふるゝなり。

我世にあらんかぎりには必ず恩恵と憐憫と我にそひきたらん、
我はとこしへにエホバの室に住まん。(詩廿三篇)。

第四章 基督の死

人の子は祭司の長また學者等に賣され、彼等は之れを
死に定め、之れを異邦人に交付し、凌辱らせ、鞭撻たせ、
又十字架に釘けさするであらう、かくて彼は第三日に甦
らん。

(*) 羅馬人。

太廿八〇十
太廿六〇〇
可一〇卅
可九〇卅
可一〇卅
可三〇卅
路四〇卅
路九〇卅
路二〇卅
路四〇卅
路廿八〇
路卅三〇

太廿八。廿
可十。四
十五。

人の子は……衆の贖罪となり、其の生命を捐てん爲に
来たのである。

約十。十
七。八。

我はわが生命を捐つるので父は我を愛したまふ、我は
また之れを取るであらう、……我は之れを捐つる權があり、
また之れを取る權がある。此の命令は我わが父より受け
たのである。

約十二。廿
四。三。廿

人の子が榮光を受くべき時は来た、實に、實に我は
爾曹に告ぐる、麥粒が地に墜ちて腐死らねば唯一にと

まるのみ、然し死なば多くの實を結ぶ。

義なる耶穌、基督は我儕の罪の挽回の祭物である、啻に我儕の爲の
みでなく、尙ほ世の爲の挽回の祭物である。(壹約二〇一、二、ヨハ子
の語)

基督は一次罪の爲に苦みたまふた、義者が不義者の爲にせられた
のである、これは我儕を神に至らしめんとてある。(彼前三〇十八、
ペテロの語)。

最後の聖言

大廿七〇
可四十六〇
詩廿四〇
詩廿二〇

我が神よ、我が神よ、何故に我を棄てたまひしか。

路廿三〇
路廿四〇

父よ、彼等を救したまへ、彼等は其の爲す所の何たるを知らざれば。

路廿三〇
詩卅一〇
詩卅五〇

父よ、我が靈を御手に托せまつる。

約十九〇
約卅〇

成就した。

かくて其の首を垂れて氣息絶えたまふた。

第五章

基督の昇天

キリスト

約廿〇十
約廿七〇

我はわが父、爾曹の父に、我が神、爾曹の神に昇る。

第六章

基督の消息(福音即ち吉報)

キリスト

(一) 父の愛

(5) 喪はれし羊

路十五〇
路四七〇

何人か百頭の羊を有つて居て、若し其の一頭を見失ふ

たら九十九頭をば野に舍き、其の迷失せたるを看出だすま
 で尋行かんことはあるまい。而して若し之れを看出だし
 たら喜ぶまいか。之れを已が肩にのせ、家に歸ると其の
 朋友と鄰人とを呼集めて、我と偕に喜べ、我が失はれた
 羊を看出だしたからといふであらう。我は爾曹にいふ、
 一人の罪人が悔改むるなら悔改むるに及ばぬ九十九の義
 人の爲に喜ぶよりも天にては喜悅がある。

かく此の小者の一人の滅ぶることは天に在す爾曹の父
 の聖旨でない。

(ろ) 失はれし貨幣

一婦人が十ドラクマを有つて居て、其の一ドラクマを
 見失ふたら燈火を點けて家を探し、遂に之れを看出だす
 まで力めて探さぬことはあるまい、之れを看出だした時
 には其の朋友と隣人とを呼集めて、我と偕に喜べ、我は
 失ひしドラクマを看出だしたからといふであらう。是の
 如く、我は爾曹にいふ、一人の罪人が悔改むれば神の使
 等の前に喜悅がある。

(*) 一ドラクマは三十錢くらゐ。

(は) 放蕩子

ある人に二人の子があつた、彼等の季子が其の父にいふには、父上よ、わが得べき爾の財産の一部を我に與へたまへと、是に於て父は其の財産を彼等に分與へた。然るに數日ならずして季子は一切を掻集めて、遠國に旅行をした、而して彼は其處に奢り生活して其の財産を浪費くしてしまつた。彼が凡て浪費くした時に其の國に大飢饉が起つたので彼は乏しくなりはじめたのである。彼は其の國の民の一人に往き、絶附いたので彼の人は豚を牧はせんとて彼を其の田庄に遣はした。彼はせめて豚の食

路十五〇
廿四。

ふた皂角子でいも腹を満たされんとしたか誰とて彼に與ふる者がなかつたのである。

彼は(俄に)我に反つて自らいふた、我が父の家にはパンを食飽きた傭人も少くないに我は茲に餓死するか。我は起つて、我が父に往つて言はう、父上よ、我は天に對し、亦爾の前に罪を犯し、爾の子と稱へるに足らぬ、爾の傭人の一人と爲したまへと。是に於て彼は起つて父に歸つた。然し尙ほ彼は遠くあつたのに彼の父は彼を認め、憐れみ、趨往き、其の頸を抱へて接吻した。子は父にいふた、父上よ、我は天に對し、亦爾の前に罪を犯し、今の子と稱へるに足らぬと。されど父は其の僕等にいふた

急ぎ最も善き衣服を持來つて彼に着せ、其の手には指環をはめ、其の足には履をはかせよ、肥えた犢牛を引來りて、之れを宰れ、而して我儕食ひて樂まん、わが子は死んだのであつたが復生し、失ふたのであつたが復得たからと。

(三) 救主の招待

路五〇卅
一〇
二〇
太九〇十
三〇
可二〇十
七〇

健全なる者は醫士の必要があらぬ、唯疾病ある者のみ(必要がある)。我は義人を招かんとて來たので無く、たゞ罪人を悔改に招かんとて來た。

路十九〇

人の子は亡びたる者を尋ねて救はん爲に來たのである。

太十一〇
廿八
卅

凡て勞苦する者、重荷を負ふ者よ、我に來れ、我は爾曹を安息ますであらう。爾曹我が軛を負ひて我に學へ、我は心が柔和で、謙遜なる者であるから、然れば爾曹は其の靈魂に安息を獲るであらう、わが軛は易く、わが荷は軽くあるからである。

約六〇卅
七〇

我に來る者は我は棄てぬであらう。

第七章 神の國

可一〇十
五〇
太四〇十
七〇

時期は満ち、神の國は近い、爾曹悔改めて福音を信せよ。

路十七〇
廿七
一〇

神の國は目立つて臨格るものでない、視よ、此處に、視よ、彼處にといふべきではない、神の國は爾曹の中にある。

約十八〇
卅六

我が國は此の世よりにあらず。

神の聖國に義と和と聖靈に於る歡樂とである、かく基督に事ふる者は神の聖旨に適ひ、又人に善とせらる、(羅十四〇十七、十八、パウロの語)。

(5) 隠れし財寶

太十三〇
四十四

天の聖國は畑に藏れた寶の如くである、人が發見だすなら之れを秘し、喜び往き、悉く其の所有を賣つて其の畑を買ふのである。

(ろ) 價貴き眞珠

天の聖國は美き眞珠を探して居る商人の如く、價貴き一個の眞珠を發見だすなら彼は往き、悉く其の所有を賣つて其れを買ふた(やうである)。

神の國に入る方法

(五) 新生

人は新に生れなければ彼、神の聖國を觀ることができぬ。

太十三〇
四十五〇
四十六〇

約三〇三
五八〇

人は水と靈とから生るゝにあらざれば神の聖國に入る
ことができぬ。肉から生るゝ者は肉であり、靈から生るゝ者は靈である。爾曹新に生るべしと我が爾に告げたるを異としてはならぬ。風は其の欲するまゝに吹く、爾は其の聲を聞くが何處から來るか、又何處へ往くか知らぬであらう、靈から生るゝ者は誰もかくの如くである。

太十八〇
一四〇
可九〇卅
四〇卅
路九〇〇
七〇〇
四〇〇
四十六〇
四十八〇

弟子等耶穌に來つていふ、天の聖國にて最も大なる者は誰なるかと。彼は孩兒を自己に召し、之れを彼等の中に立てゝいひたまふた、實に我は爾曹にいふ、爾曹改まつて孩兒等の如くならなければ爾曹は天の聖國に入ることができぬ。故に凡て

此の孩兒の如く謙る者は、是れぞ天の聖國に於て最も大なるものである。

彼等は彼(耶穌)が其の手を按ぎ、祈りたまふやうに孩兒等を彼に携來つた、弟子等は彼等を叱つた。然し耶穌は之れを見たまふた時、怒つて彼等にいひたまふた、

孩兒等の我に來るを許し、彼等を禁むるなよ、是の如きが神の聖國である。實に我は爾曹に告ぐ、孩兒の如くに神の聖國を接くる者でなければ之れに入ることはできないのである。

かくて彼は彼等を其の腕にし、其の手を彼等の上に按きて彼等を祝

可三〇十
路六、八、十
太十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十

太十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十
路一〇、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十

したまふた。

我爾に謝しまつる、あゝ、父よ、天地の主よ、爾は是等のことを智者、聰者に隠して孩兒等に顯示したまふからである、然り、父よ、是の如きは爾の前に善しとしたまふ所である。

(ろ) 窄門

爾曹窄き門より入れ、沈淪に至る門は寛く、路は大く、且つ此れに入る者は多くある、生命に至る門は窄く、路は細く、且つ之れを得る者は少くある。

太七〇十
路十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十

(は) 犁

路九〇六
十二。

其の手を犁につけて、後を顧る者は神の聖國に適はぬ。

第八章 神の國の祝福

大五〇三
路六〇廿三。

福なる哉、心の貧しき者よ、天の聖國は彼等の(有)であるから。
福なる哉、哀しむ者よ、彼等は慰めらるべければ。

福なる哉、柔和なる者よ、彼等は地を嗣ぐべければ。
福なる哉、餓渴きて義を慕ふ者よ、彼等は飽かさるべければ。

福なる哉、哀憐む者よ、彼等は哀憐を得べければ。
福なる哉、心の清き者よ、彼等は神を見るべければ。
福なる哉、構和ぐ者よ、彼等は神の子等と稱ばるべければ。

福なる哉、義の爲に責めらるる者よ、天の聖國は彼等の(有)であるから。

福なる哉、爾曹よ、我が爲に、人爾曹を責め、爾曹を誣ひ、種々爾曹を悪口する時。喜べ、樂しめ、天に於る

爾曹の報賞大なれば。

徒廿〇卅五。

受くるよりも與ふるは福である。

路十一〇廿八。

福なる哉、神の言をさへて、之れを守る者よ。

約廿〇廿九。

福なる哉、見ずして、尙ほ信ずる者よ。

第九章 神の國の責任

(一) 愛

爾、爾自身の如く爾の鄰人を愛せよ。

太廿二〇
可廿九〇
路十〇廿
利七〇
太七〇十
路六〇卅

爾曹凡て人々が爾曹に爲さんと欲する所のことを亦彼等に爲よ。

太五〇四
路四十八
七〇廿
八〇卅

爾の鄰人を愛し、爾の仇を憎むべしとは爾曹が聞いた所であらう、然し我は爾曹に告ぐ、爾曹の仇を愛し、爾曹を憎む者に善を行ひ、爾曹を呪ふ者を祝し、爾曹を責むる者の爲に祈禱せよ、然らば爾曹は天に在す爾曹の父

の子等とならう、彼は善人と悪人との上に(齊しく)其の日を昇らせ、義者と不義者との上に(齊しく)雨を降らせたまふのである。爾曹若し爾曹を愛する者を愛するなら爾曹何の報賞を得やうか、罪人等も己を愛する者を愛するのである、爾曹若し爾曹の兄弟にのみ安否を問ふなら爾曹何の他に優る所があらうか。……故に爾曹の天の父の完全さが如く爾曹も完全くあれ。

約十三〇
卅四、
卅五。

新なる誠命を我は爾曹に與ふ、爾曹互に愛すべしと、我が爾曹を愛する如く爾曹も亦互に愛せよ。爾曹若し互に愛するならば、是れに由つて凡て人は爾曹が我が弟子たるを知るであらう。

路六〇卅
六〇、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百。

爾曹は爾曹の父の慈悲深くまします如く慈悲深くあれ。(人を)是非する勿れ、爾曹是非せられぬであらう、爾曹人を罪する勿れ、爾曹罪せられぬであらう、宥せよ、爾曹宥さるゝであらう、與へよ、爾曹に與へらるゝであらう、量をよくし、壓入れ、搖入み、溢れさせて彼等は爾曹の懐に入るゝのである。爾曹が是非する所の決定を以て爾曹是非せられ、爾曹が量る所の量を以て爾曹も亦量らるゝのである。何故に爾は爾の兄弟の眼中にある塵を見て、爾自身の眼中にある梁木をば考へざるか。如何で爾は兄

弟に爾の眼中の塵を我に除らせよといふであらうか、視よ、爾自身の眼中に梁木あるに。爾、偽善者よ、まづ爾自身の眼から梁木を除け、然らば爾は爾の兄弟の眼より塵を除得るやう明く見ゆるやうになるのである。

其の鄰人を愛する者は律法を完全うしたのである。それ爾姦淫する勿れ、爾殺す勿れ、爾食する勿れといふ、此の餘になほ誠命があつても爾自身の如く爾の鄰を愛すべしといふ此の言の中に包つて居る。(羅十三〇八、九、パウロの語)。

慈悲、矜恤、謙遜、柔和、忍耐を衣よ、互に忍び、若し人、他に責むべきことあらば之れを怨せ、主が爾曹を恕したまふた如く爾曹も然

せよ、此の諸事の他に愛を衣よ、是れ衆徳の結目である。(西三〇十二、十四、パウロの語)。

我諸人の言、又天使等の言を以て語るとも愛が無くば我は鳴銅であり、又響く鼓である。我預言の天稟あり、凡ての奥義と凡ての知識とを曉り、我諸山を移す凡ての信仰ありとも愛が無くば我に何かあらん。我費人を養はんとして凡て我が所有を施すとも、又我焼かれんとて我が身體を興ふるとも愛が無くば何等我を益する所は無い。愛は忍び、憐み、愛は妬まず、愛は誇らず、驕傲らず、非禮を行はず、利己ならず、怒らず、悪を發かず、不義に於て喜ばず、眞理を以て喜び、凡て包容み、凡て信じ、凡て望み、凡て忍ぶのである。愛は衰ふるものでなく、預言は廢り、方言は息み、知識も廢る。我等は全く知らず、

我等は全く預言せず、全きもの來る時全くなきもの廢る。我幼兒たりし時幼兒の如く語り、我幼兒の如く感じ、我幼兒の如く思ふた、今我人となり幼兒のことを棄てたのである。我等は今鏡の中に見るが如く暗けれども後には面と面と相見る、今我は全く知らず、然れど後には我が知られたる如く我知るであらう。然れども今信、望、愛、此の三がある、此等の(中)最も大なるものは愛である。(哥前十三章、パウロの語)。

愛する者よ、互に愛せよ、愛は神より(出づる)からである、愛する者は各々神より生れて、神を識る。愛さぬ者は神を識らぬ、神は愛であるからである。(壹約四〇七、ヨハ子の語)。

爾曹憐憫あれ、兄弟として愛し、憐み、謙れ、惡を以て惡に報いず、或は語を以て語せず、かへつて祝せよ。(彼前三〇八、九、ペテロの語)。

(5) 親愛のサマリヤ人

ある人エルサレムからエリコへ下つた、彼は盜賊の中に陥ちたが(盜賊等は)彼を剥ぎ、彼を擲き、半死にして彼を棄去つた。偶然一人の祭司が其の路を下つて往つたが彼を見て(其の儘)對側を過ぎて往つた。又同じくレビの人も此の場に来たが彼を見て(其の儘)對側を過ぎて往つた。然るにあるサマリヤ人旅して彼の(倒れて)あつた所に来か

り、彼を見た時憐憫の念を起し、彼に來り、其の傷を
縛み、油と酒とを傷に注ぎ、彼は己が畜に彼を乗せ、旅
舎に伴ふて彼を看護した。翌朝彼は二デナリを出だし、
之れを舎主に與へていふた、此の人を看護せよ、爾是れ
より多く費す所あらば我はわが歸途に爾に償ふであらう
と。

爾は此等三人の中孰れが盜賊の中に陥ちた者の鄰人た
るを示したと思ふか。

(イ) エリコはパレステナの都府エルサレムより北の方
八里にある。

(ロ) レビは神殿の奉仕を爲す人のこと。

(ハ) サマリヤ人はパレステナの中に住ひながらユダヤ
人と頗る不和の人民。

(ニ) デナリは約我が七十五錢くらゐ。

(ル) 苛酷なる僕

ペテロは進んで耶穌にいふた、主よ、わが兄弟が我に罪を犯した時、
幾次までこれを宥すべきか、七次までであるか。耶穌は彼にいひたま
ふた、

七次までと爾にいはじ、七次を七十倍までにせよ。
然れば天國はある王が其の臣僕と會計をするやうであ

る、會計を始めた時、王に一萬タレントの負債ある者を連れて來た。然し償ふべきものをもたなんだので主君は彼と其の妻と子及び凡ての所有物を賣りて償へと命じた。其處で臣僕は俯伏して願ふた、主よ、暫く猶豫したまへ、盡く爾に償還はんと。臣僕の主君は憐憫を起し、彼を放免ち、且つ其の負債を許した。

然し其の臣僕出で、自己に二百デナリの負債ある一人の同僚にあふたので、之れを捕へ、其の喉を扼めて負債を償へといつた。同僚は俯伏して彼に願ふていふた、暫く猶豫したまへ、盡く爾に償還はん。彼は首肯れずに、往つて其の負債を償ふまで彼を牢獄に入れた。

其の同僚等は其のありしことを見て甚く愛へ、其のありしことを悉く主君に申告た。そこで主君は彼を召していふた、爾惡臣よ、爾我に願ふたので我は爾の負債を許した、我が爾を憐みし如く爾も自己が同僚を憐むべきではないか。其の主君は怒つて彼が負債を盡く償ふまで彼を獄吏に付した。

爾曹心より己が兄弟を許さなければ我が天の父も爾曹に是くなしたまふであらう。

(イ) 耶穌の弟子の一人、

(ロ) タレントは凡そ我が二千四百圓に當る。

(二) 謙讓

約十三〇
三二五
十二
十七

耶穌は父が一切を自己の手に授けたまふたこと、又自己が神より来て、神に往きたまふことを知り、晩餐の席より立ち、其の表衣を脱ぎ、手巾を取り、自ら帯をしめたまふた、かくて水を盥に盛り、弟子等の足を洗始め、帯びし手巾にて之れを拭きたまふた。……耶穌は彼等の足を洗畢り、其の表衣を取り、後宴につき、彼等にいはたまふた、

わが爾曹に爲したことの何であるかを爾曹知るか。爾曹は我を師又主と稱ふ、爾曹が然いふは宜し、我は然らである。されば我若し主であり、又師であつて爾曹の足を洗ふたなら爾曹も亦互に足を相洗ふべきであらう。我

太廿〇
六八
可九〇
可十〇
可十四
路廿七
廿六
廿七

が爾曹に爲したる如く爾曹に爲さしめんとて我は模範を爾曹に與へたのである。實に、實に我は爾曹に告ぐる、僕は其の主より大なるものでない、又遣はさるゝ者は之れを遣はした者よりも大なるものでない。爾曹若し之れを知つて之れを爲さば爾曹福なる哉。

爾曹の中にて大ならんと欲ふ者は爾曹の役者とならん、爾曹の中にて首位たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるであらう、かく人の子は事へられんとにわらず、事へんとて來つたのである。抑々宴をする者と給仕する者とは孰れが大なるか、宴をする者でないか。然れど我は爾曹の中

に於て給仕する者の如くである。

路九〇四
十八。

凡て爾曹の中にて微者は是れ大なる者である。

路十四〇
一。

爾、人より婚筵に招かれたる時は首座に着くな、恐らくは爾よりも尊き人彼に招かれて來らば爾と彼とを招いた者は來て爾にいふであらう、請ふ、此の人に座を譲りたまへと、然る時爾は恥ぢて末座に着くやうにならう。然し爾招かれた時は往いて末座に着け、爾を招いた者が來て、友よ、上座に着けといふなら爾は偕に招かれた者の前に榮譽を得るであらう。

太廿三〇
十二。

自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせらる。

神は驕傲者を拒ぎ、謙卑者に恩を施したまふ、(雅四〇六、ヤコブの語)、(彼前五〇五、ペテロの語)。

(三) 克己

太十〇卅
七。

我よりも父や母を愛する者は我に副はず、我よりも子や女を愛する者は我に副はぬ。

約十二
廿六

其の生命を愛する者は之れを失ひ、此の世にて其の生命を惡む者は之れを保ちて永生を保つに至る。若し人に事ふるなら我に従へ、わが居る所にはわが使ふる者も居る。人若し我に事ふるなら我が父は彼を尊みたまふ。

可八〇
卅四
太十六
卅七
太十
卅八
路九
卅六
六〇

若し人我に従はうと欲ふなら自己を捐て、己が十字架を擔ひて我に従へ。己が生命を救はうと欲ふ者は之れを失ひ、我の爲、福音の爲に其の生命を失ふ者は之れを救ふであらう。全世界を利し得るとも其の生命を失はば何の益があらう。人何をもて其の生命に易へんか。我を愧

ぢ、我が言を愧づる者は……人の子も其の榮光と父の榮光とを以て、聖き使と共に來る時之れを愧づべし、其の時其の行爲に循つて各々に報ゆるであらう。

若き宰

ある幸趨來り、其の前に跪きて彼に問ふた、善き師よ、永生を獲るには何を爲すべきか、耶穌は彼にいひたまふた、

何故、我を善きといふか、唯神の外、誰も善きものはない。爾は律令を知るであらう、殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、偽證する勿れ、欺く勿れ、爾の父と母と

可十
卅七
太十九
卅六
路十八
卅七

を敬へ、爾の鄰人を自己の如く愛すべしと。

若き人は答へていふた、師よ、我幼時より此等を守つた、何で缺があるか、耶穌彼を注視め、彼を愛していひたまふた、

爾は尙ほ一を缺いて居る、往け、爾の所有を賣り、貧者に施せ、然すれば天に財寶を得るであらう、而して來り、我に従へよ。

若き人は此の言ひたまふところを聞いて憂へ、悲しみて去つた、彼は大なる所有を有つて居つたからである。

耶穌は其の弟子に告げたまふた、

富を有つ者が神の國に入るは如何にも難い、駱駝が針の穴を通るは富者が神の國に入るよりも易い。

彼等は大に異んで彼にいふた、然らば誰が救はれやうか。耶穌は彼

等を注視めていひたまふた、

人には能さぬ、然し神には然うでない、凡ての事神に
は能さぬことが無いから。

満足して神を虔ふは大なる利である、我儕は何も携へずして世に來る、何も携へずして往く、食物あり、被服があらば我儕は満足すべし。富者たらんと欲ふ者は誘惑、籠絡、愚にして害ある慾情に陥る、かゝるものは人を滅亡と沈淪とに溺らすのである。金銀を愛するは萬惡の根である。

現世の富者に勸めよ、彼等驕ることなく、定まらぬ富を望まず、我儕を樂ませんとて豊に諸物を賜ふ神のみ望み、又善を行ひ、善事に富み、をします施し………未來の爲に自ら善き基を造るをよしと

す、是れ眞に生命たる生命を得ん爲である、(提前六〇六〓十、十七〓十九、パウロの語)

(四) 基督に對する敬虔

ベタニヤに於る奉事

約十二〇
六廿六〓八
六三〓十
可三十四〓九

耶穌……ベタニヤに來たまふた、此處は耶穌の會てラザロを死より甦らせたまふた所である。彼等は此處に耶穌の爲に晚餐を設けた、時にマリヤは貴き香油一斤をもて耶穌の足に塗り、己が髪の毛もて其の足を拭ひ、香油の芳香は家の中に満ちた。然し彼等の中に不快の念を抱く者があつて、此の浪費は何の爲であるか、價高く賣つて

貧者に施すことができやうにといつて彼女を咎むるものがあつた。

然し耶穌はいひたまふた、彼を容しおけ、何故に彼を累はすか。彼は善功を我に爲すのである。爾曹は常に貧者に接して何時にても自由に彼等を恵むことができやう、我は常に居るので無い。彼はできるだけを爲した、埋葬の爲に前以て我が身に塗つたのである。實に我は爾曹に告ぐ、全世界の中凡そ此の福音の宣傳へらるゝ所には彼が爲したる所も彼の紀念として語らるゝであらう。

(*) エルサレムに近き村。

(五) 祈禱

爾曹誘惑に入らぬやう守り、且つ祈れ、心は逸れども肉體は弱くある。

太廿六〇
可十四一〇
路廿八〇
路廿二〇
四十六

我爾曹に告ぐ、求めよ、爾曹に與へられ、尋ねよ、爾曹遇ひ、叩けよ、爾曹に啓かるゝであらう。凡て求むる者は獲、尋ねる者は遇ひ、叩く者には啓かるゝのである。爾曹の中誰か、父であつて其の子がパンを請ふに石を與へやうか、或は魚を請はんに、魚の爲として蛇を與へやうか、或は若し彼卵を請はんに蠍を與へやうか。されば爾曹惡きながらも善き賜を其の子に與ふるを知れば況して天に在す爾曹の父は自己に請ふ者等に聖靈を與へたまはざることがあらうか。

路十一〇
九一〇
三〇
太七〇
七
十二

爾曹祈る時は偽善者の如くするな、彼等は人に見られやうとして會堂や、又街衢の角に立つて祈ることを好む。實に我は爾曹に告ぐ、彼等は己に彼等の報を得たのである。爾祈る時は自己の室に入り、爾の戸を閉ぢ、密に祈れ、然らば密に爾を見たまふ父は爾に報いたまふのである。

太六〇五
一八〇

祈禱には言を多くする勿れ、……爾曹の父は爾曹の願

はぬ前に爾曹の求むる者を知りたまふからである。
是故に爾曹かく祈れ、(次項主の祈禱につづく)

(*)猶太人の祈禱所。

主の祈禱

太六〇九
路十一〇三
二四〇四

天に在す我儕の父よ、(願はくは)聖名の尊崇されんことを。
聖國の臨格らんことを。聖旨の天に成る如く地にも
成させたまへ。我儕の日用のパンを我儕に與へたまへ。
我儕に罪を犯す者を我儕が赦す如く我儕の罪をも赦した
まへ。我儕を誘惑に入れたまふ勿れ、悪より我儕を救ひ

たまへ。

太六〇十
四〇十
可十一〇
廿五〇
十六〇

若し爾曹人の罪を赦さば、爾曹の天の父も爾曹の罪を
赦したまふであらう。然し若し爾曹人の罪を赦さずば、
爾曹の父も爾曹の罪を赦したまはぬであらう。

何事をも思煩ふ勿れ、たゞ何事にも感謝と共に祈禱をし、懇求をし、
爾曹の求むる所を神に告げよ。人の凡て思ふ所に過ぐる神の平安は爾
曹の心と爾曹の意とを基督、耶穌の中に守るであらう、(腓四〇六、七、
パウロの語)。

(六) 斷食

爾曹斷食する時は偽善者の如く愛容をするな、彼等は斷食し居ると人に見られんやうに顔色を損ふのである。實に我は爾曹に告ぐ、彼等は已に彼等の報を得たのである。然し爾曹斷食する時は爾の首に膏をつけ、又爾の面を洗へ、是は斷食し居ると人に見えず、見えざるに在す爾の父に見えん(とてなり)、而して見えざる所にて見たまふ爾の父は爾に報いたまふのである。

(七) 施濟

爾に請ふ者には與へよ、爾に借らんとする者に爾、背く勿れ。爾曹は人の爾曹に爲さんと欲することを亦同じく人に爲よ。若し爾曹……爾曹に善を爲す者に善を爲さば何等賞むる所があらうか、罪人も亦然するからである。爾曹若し爾曹に報ゆるを望んで人に貸すなら何等賞むる所があらうか、罪人も報賞を望んで罪人に貸すのである。然し爾曹の敵を愛して善を作せ、何を望まずして貸せよ、然すれば爾曹の報賞は大なるであらう、且つ爾曹は至高者の子となるであらう、彼は背恩者にも悪者にも慈悲深くましますからである。

太五〇四
十二
路六〇卅
一、卅
三、卅
五、卅

太六〇十
六、十
八、十

路十二、三、四、
太六〇、廿一。

爾曹の有つものを賣りて施せ、古びることなき財囊を
自己の爲に造れ、盡きざる財寶を天に蓄へよ、彼處は盜
人も近かず、蠹も壞らぬのである。是は爾曹の財寶のあ
る所に爾曹の心も亦あるから。

太六〇一
四。

人々に見られんとて彼等の前に爾曹の施濟を爲すを慎
め、然らせぬならば天に在す爾曹の父より報賞を得ぬで
あらう。

是故に爾、施濟を爲す時、偽善者が人に尊まれんとて
會堂や、街衢に爲すが如く、爾の前に喇叭を吹く勿れ。

實に我は爾曹に告ぐ、彼等は彼等の報賞を得たのである。
爾、施濟を爲す時は、爾の右手の爲す所を爾の左手に知
らするな、是は爾の施濟の見えざる所にあらん爲である、
而して見えざる所に見たまふ爾の父は爾に報いたまふで
あらう。

世の財寶をもち、兄弟の窮乏を見て、反て恵施の心を閉づる者は、
いかで神の愛が其の衷にあらうか。……我儕愛するに言と舌とを以て
せず、行と眞とを以てすべし、(登約三〇十七、十八、ヨハネの語)。

寡婦のミヌタ

可十二〇
四十一
路十四〇
四一〇

耶穌は賽錢箱に向つて坐し、群衆の錢を賽錢箱に投入るゝを見たまふたが、富者の多くは多額を投げたのである。其の時一人の貧しき寡婦が来たが彼は二ミヌタを投げた、此は五厘に値るのである。耶穌は弟子等を招いて彼等にいはたまふた、
實に我は爾曹に告ぐ、此の貧しき寡婦は賽錢箱に投入れた孰れの人よりも多く投げた、彼等は凡て有餘の中より投げたが、彼は其の乏しき中より有限り、活業を盡くして入れたのである。

路十四〇
十二〇

(八) 接客

爾、午餐或は晚餐を供する時は爾の朋友を請くな、或は爾の兄弟、或は爾の親戚、或は富める鄰人を(請くな)、恐らくは彼等も亦爾を請きて爾に報酬をなすであらう。然し爾、饗宴を設くる時は貧者、廢者、跛者、盲者を請け、彼等は爾に報ゆべきものを有たぬから爾は福である、爾は義人の復活に於て報酬を得るであらう。

(九) 言語

凡て樹は其の果によつて知らるゝ。惡果を結ぶ善樹は

路六〇四

十四、
十五、
太十二、
卅三、
卅七。

なく、善果を結ぶ悪樹はない。蓋は何れの樹も其の果によつて知らるゝからである。荆棘から人は無花果を採らず、又蒺藜から彼等は葡萄を集めぬのである。善人は其の心の善庫から善物を出だし、又悪人は悪庫から悪物を出だす、心に充つるから其の口が語るものである。

我爾曹に告ぐ、凡て人の語る無益なる言は審判の日に其の人陳述せなければならぬ。爾の言によつて爾は義とせられ、又爾の言によつて爾は罰せらるゝであらう。

太五〇卅
三〇
七。

往昔の人に告げられたことは爾曹聞いたであらう、爾、偽誓ふなかれ、誓ひし所は主に還すべしと、然し我は爾

曹に告ぐ、凡て誓ふなかれ、天を指しても(誓ふ勿れ)、神の御座なれば、地を指しても(誓ふなかれ)、神の承足なれば、……爾、爾の首を指しても誓ふなかれ、一縷の髪だも爾は白くし、或は黒くすることができぬから。たゞ爾の語る所は然と、否とであれ、それより多きは悪よりするるのである。

爾曹の中誰でも自ら神に事ふる者と意ふて其の舌を制御へず、己が心を欺くなら其の人の神に事ふることは徒然である、(雅一〇廿六、ヤコブの語)。

若し言に怒がなくなれば其は全き人で、全身を制御へ得るのである。若し夫れ、我儕自己に馴はせんとて馬の口に轡をかくるなら其の全體を馭し得るであらう。視よ、船も彼の如く大きく、且つ暴風に追はるゝも小舵をもて舵手の意の隨に之れを運轉することができやう。是く舌も亦小きものであつて誇ることの大なるものである、視よ、微火いかに多くの物を焼くか。舌は火、我儕が支體の中にあつて、惡の世界は舌で、全體を汚す、又萬有の球を燃やして地獄から燃出づる。各種の獸と鳥、昆蟲、海にあるもの皆制することができやう、已に人に制せられて居る、然し舌は人が制することを得ぬ、舌は靜座らぬ惡であつて、死の毒に充ちたものである。これを以て我儕は主と神とを祝ひ、又神の像に造らるゝ人を誣ふ、同じ口より祝と誣とが出るのである。

わが兄弟よ、此の如きことばあるべきで無い、(雅三〇二||十、ヤコブの語)。

爾曹の口から汚れたる語を出だすな、時に従ひ人の徳を建つる善事を(語り)、聽者に益を與へよ。……凡ての惡事と共に很毒、志慥、忿怒、喧嘩、謗讟を爾曹から去れ、互に仁慈をかけ、互に憐恤をかけ、神の基督に於て爾曹を赦したまひし如く互に赦せ、(弗四〇廿九、卅一、卅二、パウロの語)。

(十) 柔順

太十二 四十六
可三〇 卅
路八〇 卅
九〇 卅

耶穌イエソの群衆ぐんしゆうと語居かたりをらるゝ時とき、其その母はと兄弟等きやうだいたちと彼かれに來きたつたが群衆ぐんしゆうに妨さまたげられて彼かれに近ちかづくことを得えなんだ。爾なんぢの母はと兄弟等きやうだいたちと爾なんぢに會あはんとて外そとに立たてりと告つげられたが、彼かれは其その弟子等でしたちを指さしていひたまふた、
視みよ、我わが母は、我わが兄弟きやうだい。凡およそ天てんに在います我わが父ちちの聖旨みことろを行おこなふ者ものは彼かれこそ我わが兄弟きやうだい、わが姉妹しまい、わが母はである。

(十一) 善行

路十七 七

爾曹なんぢらの中うちに耕夫かうふ、或あるひは牧夫ぼくふがあるとし、彼かれが畑はたから歸かへつた時ときに、爾なんぢ、直すぐ食しよくに就つけよといふものがあらうか、寧むしろ我わが食しよくの準備じゆんびをし、我わが食くひ、又また飲のみをはるまで帶おをし、給仕きよしせよ、然しかる後のちに爾なんぢ、食くひ、又また飲のめよといふであらう。僕しもべが命めいせられたことを爲なしたからとて彼かれは僕しもべに謝しやするであらうか。かく爾曹なんぢらも命めいせられたることを皆行みなおこなふた時とき、我われ儕らは無益むえきの僕しもべ、我われ儕らの行なすべき任務つとめを爲なしたるのみと云いへ。

第十章 訓戒

(一) 怒

太五〇廿
路六〇廿
五十八

爾曹往昔の人に言はれたことを聞いたであらう、爾殺すべからず、殺すものは審判にあふべしと、されど我は爾曹に告ぐ、凡そ理由なく其の兄弟を怒る者は審判にあふであらう、又其の兄弟にバカといふ者は集議にあふであらう、爾愚物よといふ者は地獄の火にあふであらう。故に爾、爾の禮物を祭壇に献げやうとし、爾の兄弟の爾を恨み居つたを懐出だしたらば爾の禮物を壇の前におき、往きて先づ爾の兄弟と和ぎ、然る後來つて爾の禮物を献げよ。原告人に引かれて爾と道にある時、早く彼と和げよ、恐らくは原告人爾を判事に解し、判事は爾を官吏に交し、爾は獄に入れらるゝであらう。實に我は爾に

告ぐ、爾悉皆償ふまでは其處を出づることとはできまい。

(イ) 他を侮辱するに用ゐる語、

(ロ) 或は「モレ」ともいひ、希伯來人の他を罵倒る時に用

ゐる語。

復讐

太五〇廿
路六〇廿

爾はいはれたことを聞いたであらう、目にて目を(償ひ)、齒にて齒を(償へ)と、然し我は爾曹に告ぐ、惡者に逆ふ勿れ、爾の右の頬を打つものには亦他の(頬)をも向けよ。爾を訴へて爾の表衣を取らうとする者には裏衣をも之れに

交せよ。爾を一里行かしむる者とは二里行けよ。

(二) 色慾

太五〇廿
七〇八

爾はいはれたことを聞いたであらう、爾、姦淫する勿れと、然し我は爾に告ぐ、凡そ色慾を懐いて婦女を見る者は心に於て己に彼に姦通したのである。

離婚

太五〇卅
二〇

またいはれてある、

太十九〇
可十九〇
路十六〇

凡そ其の妻を出ださうとする者は離縁状を彼に與ふべしと、然し我は爾に告ぐ、姦通の外其の妻を去る者は彼に姦通せしむるのである、又出だされた婦女と結婚するも姦通するのである。

可十〇六
太十九〇
創二〇廿

開闢の原始から神は彼等を男性と女性とに造りたまふた。是に由つて人は其の父と母とを離れて其の妻に合ひ、而して二人は一肉體となる、されば彼は最早二人でなく、一肉體である。

故に神が合はせたまふたものは人が別つことはできぬ。

(三) 貪婪

太六〇廿九
路四一六〇
三十一
十

爾曹の爲に地に寶を蓄ふるな、此處には鏽と蠹とがあつて壞り、又此處には盜人が穿つて竊む、然らば爾曹の爲に天に寶を蓄へよ、其處には鏽と蠹とがなくて壞らぬ、又其處には盜人が穿つて竊まぬ、蓋は爾曹の寶のある所に爾の心も亦あるであらう。……小事に忠實なるものは大事にも亦忠實、又小事に不義なる者は大事にも不義である。されば爾曹もし不義のマンモンにすら忠實でなくば誰か眞正の富を爾曹の信用に委ねやうか。人は二主に事ふることができぬ、或は一人を憎み、一人を愛するであらう、或は一人を親しみ、一人を疎むであらう。爾曹神とマンモンとに事ふることとはできぬ。

(*)マンモンは富のこと。

太六〇廿五
路四二〇〇
廿一

是故に我は爾曹に告ぐる、爾曹の生命の爲に爾曹何を食ひ、爾曹何を飲まんかと憂ふる勿れ、爾曹の身體の爲に爾曹何を衣んかと憂ふる勿れ。生命は食物より優り、身體は衣より(も優る)ではないか。空の鳥を視よ、播かず、又穡らず、倉に收めぬのに爾曹の天の父は此等を養ひたまふ、爾曹は此等よりも價值あるものではないか。爾曹の中誰か憂慮つて其の身幹に一キニヒトを加ふることが

できるか、爾曹何故に衣のことを憂ふるか。野の玉簪花の如何に長つかを考へよ、此等は勞かず、又此等は紡がず、然れば我は爾曹に告ぐる、其の榮華の極にあるソロモンすら此等の一ほどに装はなかつたのである。神は今日ありて明日爐に投入せらるゝ野の草をさへかく装ひたまふならば況て爾曹に着せたまはぬことがあらうか、あゝ、爾曹小信ぞ。是故に爾曹は我儕何を食ふべきか、我儕何を飲むべきか、我儕何を衣んかといふて憂へてはならぬ、……爾曹の父は此等のものゝ凡て爾曹に必要なことを知りたまふから。爾曹まづ神の聖國と神の義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらるゝであらう。

是故に明日の爲に憂ふる勿れ、明日は明日憂へよ、一日憂へなばそれで足りて居る。

(イ)一キエビトは一尺五寸或は一尺八寸、

(ロ)猶太王の中で榮華を極めた王。

愼んで凡ての貪婪を戒めよ、人の生命は其の有てる物の豊富なることにあるのではない。

富有の愚人

ある富人の有つて居る田園が多く産物を出したので彼

は自ら思ふていふた、我は如何にしやうか、我が産物を
 何方に貯藏しておかうか。彼はいふた、斯うしやう、我
 が倉廩を毀つて、更に大なるものを建築し、而して凡て
 我が果穀と貨財とを貯藏しやう、尙ほ我が靈魂にいはう、
 靈魂よ、爾は數年の爲に夥多く貨財を有つて居るから安
 んじて食ひ、飲み、且つ奢れよと。されど神は彼にいひ
 たまふた、爾、愚なる者よ、今夜爾の靈魂は爾より索め
 らるゝかも知れぬ、爾が用意したるものは誰のものにな
 るであらうか。
 凡そ自己の爲に財寶を蓄へ、神について富まぬものは
 是の如くである。

(四) 自義

パリサイ人と税吏

路十八
三九
十

自ら恃んで義となし、他を侮る人に彼は此の譬喩を語りたまふた。
 二人祈らうとて神殿に詣つたが、一人はパリサイ人、
 他は税吏であつた。パリサイ人は立つて心の中で祈つた、
 神よ、我は餘人の如くならず、即ち勒索者、不義者、淫
 行者にもあらず、又此の税吏の如くにもあらざるを感謝
 しまつる。我は一週に二回斷食し、凡て有てる物の十分

一を献げまつると。税吏は遠く下立ち、其の眼を天にあげず、却て其の胸を拊つていふ、神よ、罪人なる我に憐恤あれと。

我は爾曹に告ぐる、此の人は彼の人よりも義とせられて其の家に歸つた、自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせらるゝからである。

(イ)猶太人の中にあつた一宗派の名、

(ロ)租税を取立てる役人。

(五)虚禮

パリサイ人等と數人の學者とが……耶穌の許に集まつたことがある、彼等は彼の弟子のある者が汚れた、即ち洗はない手で其のパンを食ふを見た。

蓋しパリサイ人及び凡て猶太人は古人の遺傳を守つて彼等の手をよく洗はなければ食はなかつたからである、彼等は市場から來ると手を洗はなければ食はず、其の他杯、瓶、銅器を洗ふた。

パリサイ人及び學者等は彼に問ふた、何故に爾の弟子等は古人の遺傳に従つて爲す、汚れし手で其のパンを食ふか。

彼は群衆を自己に呼集めて、彼等にいひたまふた、

我に聞いて爾曹曉れよ、外から人に入る物は之れを汚すことはできず、人から出づる者、これは人を汚す。

其の弟子等彼に此の譬喩を問ふた、そこで彼は彼等にいひたまふた、

爾曹曉らぬか、凡て外からする物は人に入つても之れを汚すことはできぬ、そは其の心に入るのではなく、腹に下り、廁に落つるからである。然し人から出づるものは人を汚す。人の心、内からであるものは悪念、姦淫、野合、殺害、偷盜、貪婪、惡計、詭騙、醜猥、疾視、褻瀆、驕慢、癡迷、凡そ此等の惡は皆内から出で、人を汚すものである。

(*)猶太人は箸を用ゐず、手で物を食ふ風俗があつたから。

(六) 偽善

路十二〇
太一〇三
可四〇廿
四二〇廿

偽善者を慎め、蔽はれて顯れざるものなく、隠れて知られざるものはないのである。爾曹が迷暗にて言ふたことは光明に聞え、爾曹が寢室にて耳に低語いたことは屋蓋の上に宣べらるゝであらう。

(七) 實行と無實

(イ) 播種者と種、附説明

播種者が播きに出た、彼が播く時あるものは道の傍に

太十三〇
三二八

可四〇三
路八〇五

第十章 訓戒

おち、踐まれ、空の鳥が来て之れを啄んでしまつた。
他の種は土多からぬ磽地に遺ちたが……日が出づると
萎れ、根がなかつたので枯れてしまつた。

他は荆棘の中におちたが荆棘が之れと共に長つて之れ
を蔽塞いだので實を結ばなかつた。

他は沃壤に遺ちたが、苗萌出で、長ち、實を結ぶこと
百倍のもあり、六十倍のもあり、三十倍のもあつた。

太十三〇
可四廿九
路八五〇
五〇一〇
十廿十

種は神の言である。道の傍にあるものは言を聞きて理
解せぬもの、其の時悪魔は來つて彼等が信せぬやう、又
救はれぬやうに其の心から言を奪ふのである。

石の上のものは聞く時に喜んで言をうくるが是等は根
なく、暫時は信すれども試験或は迫害にあふ時忽ち倒る
のである。

荆棘の中に遺ちたのは聞けども此の世の憂慮、貨財、
また此の世の快樂の爲に蔽塞がれて熟く實を結ばぬので
ある。

沃壤におちたのは正しく、善い心で言を聞き、之れを
守るもので、忍んで實を結び、百倍のもあり、六十倍の
もあり、又三十倍のもあるのである。

第十章 訓戒

(五) 二人の子

ある人に二人の子があつた、彼は先づ兄に来ていふた、
 子よ、今日我が葡萄園に行つて働けと。彼は行きたくな
 いといふたが、後に悔いて行つたのである。又彼は弟に
 来て同じやうにいふた、彼は答へて、我は行かうといふ
 たが行かなかつたのである。此の二人の中いづれが父の
 意を行ふたのであるか。

(は) 磐上の家と基礎のなき家

何故に爾曹は我を主よ、主よと呼んで、而して我が言

太廿一〇
卅八〇

太七〇廿

四〇廿
七〇四
路六〇四
四十六〇
四十九

ふ所を行はぬのであるか。
 凡そ我に來り、我が言を聞いて之れを行ふものは深く
 掘つて磐の上に其の家を建てた智者に似て居る、雨降り、
 河溢れ、風吹きて其の家を衝いたが倒れなかつた、蓋は
 磐の上に基したからである。又凡そ我が此等の言を聞き
 て之れを行はぬ者は砂の上に其の家を建てた愚者に似て
 居る、雨降り、河溢れ、風吹きて其の家を衝いたら倒れ
 た、而して其の傾倒は容易ならずあつた。

第十一章 基督教徒の生活

太五〇十
三

爾曹は地の鹽である。

可九〇五

爾曹の中に鹽を有て、互に平和にわれ。

太五〇十
四
路八〇十
六
路六〇十
一
路三〇
三
可四〇廿

爾曹は世の光である。丘の上に立てる城邑は隠るゝこ
とができぬ。人燈火を點しては斗の下におかんで、臺に
載せ、家の内の一切のものを照すであらう。かく爾曹の
光を人の前に輝かせよ、然らば人々爾曹の善行を見て天
に在す爾曹の父を崇むるであらう。

太六〇廿
二
路三〇
三
路十一〇
三
路四〇
五

身體の燈火は目である、故に爾の目が瞭であれば爾の
全體は明くあらう。然し爾の目が眩くあれば爾の全體は
暗くあらう。故に爾の身體にある光暗からば其の暗さこ
と如何に大なるであらうか。

太十〇十
六

爾曹は蛇の如く巧智く、鴿の如く撲實なれ。

敬神のこゝとを修養せよ、肉の修養は益少く、敬神のこゝとは一切に益
がある、今生と來生とに係る約束を得るのである、(提前四〇七、八、ペ
リロの語)

第十一章 基督教徒の生活

百

凡ての人に對して忍耐せよ。惡を以て惡に報いず。常に互に、又凡ての人に善を追求めよ。常に喜べ、断えず祈れ、凡てのこと感謝せよ。こは基督、耶穌によつて爾曹に求めたまふ神の旨である。……一切察て、その善を守れ、諸の惡きことを遠げよ。(撒前五〇十四、十八、廿一、廿二、パウロの語)

施す者は吝まらず爲せ、治むる者は勵んで爲し、憐む者は喜んでなせ。愛は偽善でなく、惡を惡み、善に親めよ。……互に愛し、互に奪み、事務に怠らず、精神に勵み、主に事へ、希望に喜び、患難に堪へ、祈禱に續き、聖徒の必要に施し、待遇に厚くあれ。爾曹を害むる者を祝し、祝して詛ふ勿れ。喜ぶ者と偕に喜び、哀む者と偕に哀め。……奪大志をせず、反て卑微につけ、自己を智とする勿れ。惡を以て惡に報いず。……爲し得べき所は人々と和げ、仇を報ゆる勿れ。……爾の仇

飢ゑなげ彼に食はせ、彼渴かば彼に飲ませよ、かくするは彼の首に熱火を積むのである。惡に勝たるゝ勿れ、たゞ善を以て惡に勝てよ、(羅十二〇八、廿一、パウロの語)

第十二章 基督との一致

(一) 眞の葡萄の樹

我は眞正の葡萄樹で、我が父は農夫である。我に於て果を結ばぬ枝蔓は彼これを伐裁り、果を結ぶ蔓枝は彼これを潔む、多く果を結ばせんためである。……我に居れ、

約十五〇
一八

我、爾曹に居る。枝蔓が葡萄樹に居らなければ自ら果を結ぶことのできぬ通り、爾曹が我に居らなければ果を結ぶことはできぬのである。我は葡萄樹、爾曹は枝蔓である、我に居る者と、我の彼に居る者とは是れぞ多く果を結ぶのである、我を離るゝなら爾曹は何事をも爲すことができぬ。

若し人が我に居らぬなら枝蔓の如く伐られて、枯るゝであらう、且つ彼等これを集め、火に投入れて、此れは焚かるゝ。……爾曹多く果を結び、爾曹我が弟子となるによつて我が父は榮譽を受けたまふのである。

(二) 生命のパンと水

約六〇廿九

滅ぶる食の爲に働く勿れ、永生に至る、即ち人の子が爾曹に與ふる食の爲に勞けよ。

故に彼等耶穌にいふた、我儕神の聖業を業とするには何をなさんかと、耶穌は彼等に答へていひたまふた、

神の遣はしたまへる者を信ずるは即ち神の業である。

神のパンとは天より降來て世に生命を與ふるものである。

約六〇卅三

約六〇卅

第十二章 基督との一致 百四
我は生命のパンである、我に來る者は飢ゑず、我を信する者は渴かぬ。

約六〇五

我は天より降つた活けるパンである、若し人此のパンを食ふなら永遠く活くる、わが與ふるパンは世の生命の爲にする我が肉である。

約六〇六

活かすものは靈である、肉は何をも益せぬ、わが爾曹に語つた言は靈である、又生命である。

約七〇卅

若し人渴くならば我に來りて飲めよ。

我を信する者は……其の腹より活ける水の川、流出づるのである。

此は彼を信するものどもの聖靈を受くべきをいはれたのである。

約四〇十

我が與ふる水を飲む者は渴くことがない、我が與ふる水は彼の裏に泉となり、湧出で、永生に至るのである。

第十三章 神の國の組織

(一) バプテスマ

第十三章 神の國の組織

太廿八〇
十九〇

爾曹往き、聖父と聖子と聖靈との名によつてバプテスマを施し、……萬國民を弟子とせよ。

(二) 主の晩餐

太廿六〇
廿六〇
可廿四〇
廿四〇

主耶穌 賚さるゝ夜パンを取り、謝して之れを擘き、之れを弟子に與へていひたまふた、

路廿四〇
廿四〇
哥前廿九〇
廿九〇
哥前廿五〇
廿五〇

取りて食へよ、此は爾曹の爲に與へらるゝ我が體である、我を紀念して之れを爲せよ。

食ふて後又杯を取り、謝して之れを弟子に與へていひたまふた、

爾曹皆此れより飲めよ、是は罪を赦さんとして爾曹の爲に、又衆の爲に流さるゝ新約の我が血である、之れを飲むごとくに我を紀念してかく行へよ。

哥前十一〇
廿六〇

爾曹此のパンを食ひ、杯を飲むごとに彼の來たまふまで主の死を表すのである。

第十四章 末日の審判

約十一〇
廿五〇
廿六〇

我は復活である、生命である、我を信する者は死ぬるとも活くる、凡そ生きて我を信する者は永遠に死なぬの

約五〇廿
四〇廿
九〇廿

我が言を聞き、且つ我を遣はせる者を信する者は永生を有ち、審判に至らず、死より生命に移るのである。實に、實に我は爾曹に告ぐ、死にたる者神の子の聲をさく、其の時は来る、而して聞く者は活くる。父が生命を其の衷に有ちたまふ如く彼は子にも生命を與へて、其の衷に有たせたまふ、且つ審判を行ふ權威を之れに與へたまふたのである。……

これを異むなかれ、墓にある者皆神の聲をさいて出づる時が来るであらう、善をなした者は生命を得るの復活

に、悪をなした者は審判を得るの復活に出で来るであらう。

凡そ人の前に我を告白する者は我も亦天に在すわが父の前に彼を告白しやう、然れど人の前に我を拒否む者は我も亦天に在す我が父の前に彼を拒否むであらう。

人の子は其の榮光をもて天の使と偕に来る時、其の榮光の座に坐するであらう。而して萬民を其の前に集め、彼は牧者が羊と山羊とを別つが如く彼等を別ち、其の右に羊を、其の左に山羊を置くであらう。

太十〇卅
三〇卅
路十二〇
八、九

太廿五〇
卅四一〇
卅四一〇
卅三〇
可廿六〇
廿七〇

時に王は其の右にある者にいふ、來れ、爾曹わが父に
 恩まゐる者よ、世の創始より爾曹の爲に備へられたる國
 を嗣げよ、我が飢ゑたる時爾曹は我に食を與へ、我が渴い
 たる時爾曹は我に飲料を與へ、我が旅した時爾曹は我を宿
 らせ、裸であつた時爾曹は我に着せ、我が病んだ時爾曹
 は我を訪ひ、我が牢獄にあつた時爾曹は我に來たからで
 ある。此の時義き人は彼に答へていふた、主よ、何時我
 儕は飢ゑたる爾を見て、爾に食はせ、渴きたるに、爾に
 飲ませ、何時我儕は旅したる爾を見て、爾を宿らせ、裸
 なるに、爾に着せ、何時我儕は病んだ、又牢獄にある爾
 を見て爾を訪ひまつりしかと。王は答へて彼等にいふ、

實に我は爾曹に告ぐ、此等のわが兄弟、極めて微きもの
 一人に爾曹の爲したことは、爾曹我に爲したのである。
 そこで彼は又左にある者にいふ、我を離れよ、爾曹咀
 はる者よ、惡魔と其の使等の爲に備へらるゝ永遠の火
 に入れよ、我が飢ゑたる時爾曹は我に食を與へず、我が渴
 いた時爾曹は我に飲料を與へず、我が旅した時爾曹は我
 を宿らせず、裸であつた時爾曹は我に着せず、病み、又
 牢獄にあつた時爾曹は我を訪はなかつたからである。此
 の時彼等も答へていふた、主よ、何時我儕は飢ゑ、或は
 渴き、或は旅し、或は裸なる、或は病み、或は牢獄にあ
 るを見て、爾に事へまつらなかつたであらうかと。此の

時彼は彼等に答へていふ、實に我は爾曹に告ぐ、此等の極めて微き者の一人に爾曹の爲さざりしは我に爲さなかつたのである。

此等は永遠の刑罰に入り、義き者は永遠の生命に入る。

其の日と時とは誰も知らぬ、父の外、天の使等も、子も(知らぬ)。……爾曹は爾曹の主が何れの日に来るかを知らざれば爾曹慎み、守つて祈れ。然れど知れよ、若し家の主人が盗人の何れの時に來るかを知らば守つて其の家を破らせぬであらう。是故に爾曹用心せよ、爾曹の知らぬ時に人の子は來るであらう。適時に家の者に食を與

太廿四〇
四卅六〇
可十三〇
路卅二〇
四卅九〇

へさせやうとて、其の主人が其の家を幸らする忠僕は誰であるか。其の主人が來る時かく行ひつゝあるを認めらるゝ僕は福である、實に我は爾曹に告ぐ、主人は己が所有を彼に幸らすであらう。然し若し其の惡僕が我が主人の來るは遅からうと思ふて、己が同僚の僕を毆始め、酒飲と共に食飲するなら其の僕の主人彼の預期せぬ日に、彼の知らぬ時に來つて彼を切り、其の定業を偽善者と共にするであらう、彼處に哭き、且つ切齒することがあらう。

其の主人の意を知らながら準備もせず、其の意に服ふて行はない僕は扑たるゝことも多くあらう、然し知らん

で扑たるべきことをなした者は扑たるゝことも少くあら
う。多く與へらるゝ者は多く要めらるゝのである。

凡て善樹は善果を結ぶと、惡樹は惡果を結ぶ。善樹は
惡果を結ぶことができず、惡樹は善果を結ぶことができ
ぬ。凡て善果を結ばざる樹は伐られて火に投入せらるゝ
のである。……我を主よ、主よといふもの皆天國に入る
にあらす、天に在すわが父の聖意を行ふ者のみ。其の日
に多くの人我に主よ、主よ、我儕は爾の名によつて預言
したるにあらすや、爾の名によつて惡魔を追ひたるにあ
らずや、又爾の名によつて多くの大なる奇跡を行ひしに

大七〇十
三〇廿

あらずやと、いふであらう。其の時我は彼等にいはう、
我曾て爾曹を知らず、我を離れよ、爾曹惡を爲すもの。

(5) 畑の稂莠、附 説明

天國は嘉種を其の畑に播く人に似て居る、然し人々の
寝ねた間に彼の敵が來て、麥の中に稂莠を播いて、去つ
た。然し苗が成長ち、實を結ぶ頃稂莠も亦見れたのであ
る。家の僕等は來て、彼にいふた、主よ、爾は爾の畑に
嘉種を播きたまふたではなかつたか、さらば何處より此
の稂莠は來たのであるか。彼は彼等にいふた、敵がこれ

大十三〇
廿四

を爲したのである。僕等は彼にいふた、然らば爾は我儕が往つて、之れを集むるを好みたまふか。然し彼はいふた、否、恐らくは爾曹稂莠を集むる間に爾曹之れと共に麥をも抜くであらう。收穫まで兩者とも成長ておかう、收穫の時我は刈者に、まづ稂莠を集め、焼く爲に之れを束ね、麥をば我が倉廩に集めよといはう。

太十三〇
卅七〇
四十三〇

嘉種を播く者は人の子である、畑は世界であり、嘉種は(天)の國の子類であり、稂莠は悪者の子類であり、之れを播いた敵は悪魔であり、收穫は世の終末であり、刈者は(天)の使等である。故に稂莠が集められて火に焼かる、

如く、世の終末にも是の如くである。人の子は其の使等を遣はさう、而して彼等は凡て蹟癩となる者、又悪を爲す者を其の國より集めて、之れを火の爐に投入れ、彼處に哭くこと及び切齒することがあらう。其のとき義者は其の父の國にて日の如く耀くのである。

(ろ) 網

天國は海に投つて種々の魚を捕る網に似て居る。収つる時彼等は濱邊に曳きあげ、坐して嘉き者を器に入れ、悪き者を外に棄つるのである。

太十三〇
四十七〇
五十七〇

世の終末にかくあらう、(天の使等いで、義き者の中より悪き者を甄ち、是等を火の爐に投入れ、彼處に哭くと及び切齒することがあらう。

(は) 十人の處女

天國は燈火を執つて新郎を迎へんとて出でたる十人の處女に似て居る、彼等の五人は愚にして五人は賢くあつた。愚なる者は彼等の燈火を執る時油を携へなかつた、然し賢き者は彼等の燈火と共に油を器に有つて居つた。さて新郎が遅くなつたので彼等は皆假寢をして眠つた。

しかし夜中に呼聲があつて、視よ、新郎が見えた、來れ、爾曹彼を迎へんとて出でよと。處女等は皆立つて、其の燈火を整へた、そこで愚なる者は賢き者にいふた、爾曹の油を我儕に分與へよ、我儕の燈火は消えかゝつたからと。然し賢き者は答へた、恐らくは我儕と爾曹とに足るまい、爾曹は賣る者に往きて爾曹の爲に買へと。彼等が買はうとて往つた間に新郎は來た、用意のあつた者は彼と共に婚筵に入り、而して門は閉ざされてしまつた、後に彼の他の處女等は來ていふた、主よ、主よ、我儕に開きたまへと。然し彼は答へていふた、實に我は爾曹に告ぐ、我は爾曹を知らぬと。是故に用心せよ、爾曹は日と

時とを知らぬからである。

(に) 葡萄園の農夫

太廿〇一
一十六

天國は朝夙く出で、其の葡萄園に工く者を雇ふ家主に似て居る。彼は工く者と一日一デナリを約束して、彼等を其の葡萄園に遣はした。

彼は第三の時出で、市場に空しく立つ者等を見、而して彼等にいふた、爾曹も葡萄園に往け、相當のものを我爾曹に與へやうと。彼等は往つた。第六及び第九の時また出で、同じく爲した。彼は第十一の時また出で、立

る者等を發見だして彼等にいふた、何故に爾曹は終日空しく此處に立つかと。彼等は彼にいふ、我儕を雇ふ者が無いからであると。彼は彼等にいふ、爾曹も葡萄園に往けと。

黄昏となつた時葡萄園の主は其の家宰にいふ、工く者等と呼べ、而して後の者から前の者にと彼等の工賃を拂へよと。第十一の時に雇はれた者等は來て、各自一デナリを受けた。前の者等が來た時、彼等は多く受くるであらうと思ふたが彼等も各自一デナリを受けた。彼等は之れを受けた時、此等の後の者等は唯一時働いたのみであるに、爾は終日勞苦して暑熱を忍んだ我儕と彼等とを同

じくしたまふかといふて吐いた。然し彼は答へて彼等の一人にいふた、友よ、我は爾に不義をしたのでない、爾は我と一デナリを約束したではないか。爾の(もの)を取つて、去れよ、爾に爲た如く後の者にも與へたいのである、我がものをもて我がしたく思ふやうにするは正しくあるまいか、我が善いから爾の眼が悪いか。

是く後の者は前に、前の者は後に(なるであらう)。

(イ)午前九時、

(ロ)同 十一時、

(ハ)午後三時、

(ニ)同 五時、

(は)タレント

太廿五〇
路卅四〇
廿九〇
廿六〇

ある人が他國に往くので、其の僕等と呼びて、其の所有を彼等に委託けた。各自の技倆に應じて一人には五タレントを、他には二タレントを、又他には一タレントを與へて、旅行した。五タレントを受けた者は、往き、之れを以て商賣をし、他に五タレントを贏けたのである。二タレントを受けた者も同じく他に二タレントを贏けた。然し一タレントを受けた者は、往き、地を掘つて其の主の金を藏した。

久しくして後此等の僕等の主は(歸つて)来て彼等と計算をしたのである。五タレントを受けた者は出で、別に五タレントを持参していふ、主よ、爾は五タレントを我に委託けたまひしが、視よ、我は他に五タレントを贏けたと。其の主は彼にいふた、善哉、善且つ忠なる僕よ、爾は微少なことに忠實であつた、我は爾に多くの物を宰らすであらう、爾の主の喜悦に入れよ。又二タレントを受けた者も来ていふた、主よ、爾は二タレントを我に委託けたまひしが、視よ、我は他に二タレントを贏けたと。其の主は彼にいふた、善哉、善且つ忠なる僕よ、爾は微少なことに忠實であつた、我は爾に多くの物を宰らすで

あらう、爾の主の喜悦に入れよ。また一タレントを受けた者も来ていふた、主よ、我は爾が苛酷者で、播かぬ所から穫り、撒らさぬ所から聚むる者であることを知つたので、我は懼れて往き、爾のタレントを地に藏しておいた、視よ、爾は爾のものを得たまふたのであると。然し其の主は答へて彼にいふた、爾、悪く且つ怠れる僕よ、爾は我が播かぬ所より穫り、撒らさぬ所より聚むるを知つたら、我が金を銀行に預くべきであつた、然うすれば我が来る時、我はわが金を利息と共に受けたのであつた。故に彼から其のタレントを取上げて十タレントを有つ者に與へよ。凡て有つ者は與へられて餘裕がある、然し有たぬ者

は其の有つ者さへ取らるゝであらう。無益なる此の僕を外そとの暗黒くらきに投げよ、彼處かしこに哭くこと及び切齒はがみすることがあらう。

(*)一ダレントは銀なら二千四百圓餘に當る。

第十五章 天

路廿〇卅
可六〇卅
大廿二〇

此の世の子類は娶りまた娶らるゝ、然し彼の世に入り、死者の中より甦よみがへるに足るとせらるゝ者等は娶らず、又娶られぬ、彼等は最早死なず、(天の使等に齊しくある、又

復活の子類であつて、神の子類である。

約十四〇

爾曹の心に愛ふるなかれ、爾曹は神を信じ、また我をも信せよ。わが父の家には多くの居室がある、……我は爾曹の爲に處を準備せんとして往くのである。

第十六章 最後の獎勵

約十四〇
廿三、廿四

若し爾曹我を愛するならば爾曹は我が誠命を守らう。……我が誠命を有つて之れを守るものは我を愛する者で

ある、我を愛する者は我が父に愛せらる、我は彼を愛し、
 之れに我を顯すであらう。……若し人があつて我を愛す
 るならば我が言を守らう、而して我が父は彼を愛し、我
 儕は彼に來り、彼と偕に住むであらう。我を愛せぬもの
 は我が言を守らぬ、爾曹が聞く所の言は我の(言)にあらす、
 我を遣はしたまふた父のである。

約十四
廿七、
廿八。

平和を我は爾曹に遺す、わが平和を我は爾曹に與へる、
 世の與ふるが如くならず、我これを爾曹に與ふ。爾曹の
 心に憂ふる勿れ、怖るゝなかれ。爾曹は我が爾曹にいへ
 る(こと)を聞く、我は去り、而して爾曹に來ると。若し爾

約十五
七、十、
十四。

曹我を愛するならば我は父に往くによつて爾曹は喜ぶで
 あらう、父は我よりも大なるからである。

若し爾曹我に居り、我が言爾曹に居らば願ふ所何事に
 ても爾曹に爲さるゝであらう。爾曹多く果を結び、我が
 弟子となるによつて我が父は榮光を受けたまふのである。
 父が我を愛したまふ如く我も爾曹を愛す、爾曹我が愛に
 居れよ。若し爾曹我が誠命を守るならば爾曹は我が愛に
 居るのである、我はわが父の誠命を守つたので其の愛に
 居るが如くであらう。我は我が喜びを爾曹に在らしめ、
 且つ爾曹の喜びを充たしむる爲に是等のことを爾曹に語

つたのである。我が爾曹を愛する如く爾曹互に愛せよ、これは我が誠命である。人が其の友の爲に自己の生命を捐つるといふ、これより大なる愛は誰も有たぬ。若し爾曹わが爾曹に命ずる所のことを行はば爾曹はわが友である。

約十五〇

わが爾曹に語つたことを記憶せよ、僕は其の主より大なる者でない。若し彼等が我を責めたならば亦爾曹をも責むるであらう、若し彼等がわが言を守つたならば彼等は亦爾曹の(言)をも守る。

約十六〇

我は父より出て世に來たのである、又世を去つて、父に往く。

第十七章 最後の祈禱

太廿六〇
可十四〇
路廿二〇
四十二〇

あゝ、わが父よ、若し協はば此の杯を我より過去らせたまへ、されどわが欲する如くでは無く、たゞ爾の(欲するが)如くになれ。

約十七章

父よ、時となりぬ、爾の子が爾を榮めまつる爲に爾の

子を榮めさせたまへ、爾は己に一切の肉身の上うへに權を彼に與へたまへり、これ爾の彼に與へたまへる凡百の者に永生かぎりなきいのちを與へさせんが爲である。夫れ永生とは唯獨の眞の神、爾と爾の遣はしたまへる耶穌、基督を知ることである。我は世にあつて爾を榮め、爾が我に爲させんとて我に授けたまへる業を全うしたり。父よ、世界のいまだ有らざる前にわが爾と偕ともに有ちし榮光をもて、今茲に爾と偕に我を榮めさせたまへ。我は爾が世より甄えらびて我に授けたまひし人々に爾の聖名を顯せり、彼等は爾のもの、而して爾は我に彼等を授けたまへり、彼等は爾の言を守れり。爾が我に與へたまひし者は皆爾よりであると

今、彼等は曉れり、爾が我に與へたまひし言は、我これを彼等に授けたればなり、而して彼等は之れを受け、我が爾より出でたる眞理を曉り、且つ爾が我を遣はしたまひしを信じたり。我は彼等の爲に祈る、我は世の爲に祈らず、たゞ爾が我に授け給ひし者の爲のみ、彼等は爾のものなり、凡て我のものは爾のもの、爾のものは我のものなり、而して我は彼等に於て榮めらるゝなり。我は最早世にあらず、此等は世にあり、我は爾に至るなり。聖き父よ、爾の我に授けたまひし者等を爾の名によりて守り、彼等をして我儕の然るが如く一ならしめたまへ。我は彼等と偕なりし時、爾が我に授けたまひし者等を爾の

名によりて守りぬ、我は彼等を防衛れり、彼等の一人も失はれず、たゞ沈淪の子のみ(沈淪びぬ)。……しかれども今、我は爾に至る、わが此等のことを世に語るは我が喜悅を彼等に満たしめん爲なり。我は彼等に爾の聖言を授けぬ、されど世は彼等を惡めり、是は我が世のものにあらざる如く、彼等も世のものにあらざるが故なり。我は爾が彼等を世より取去りたまふことを祈らず、たゞ惡き(もの)より彼等を守りたまへと(祈る)のみ。我が世のものにあらざる如く、彼等も世のものにあらず。彼等を真理の中に潔めたまへ、爾の聖言は真理なり。爾が我を世に遣はしたまひし如く、我は彼等を世に遣はしぬ。彼等の爲

に我は自ら潔む、彼等が亦真理の中に潔められん爲なり。我は此等のもの、爲にのみ祈るにあらず、彼等の言によりて我を信するもの、爲にのみ、是は父よ、爾、我に於る、我、爾に於る如く、彼等が凡て一ならん爲、彼等も亦我儕に於て一ならん爲、世をして爾が我を遣はしたまへるを信せしめん爲なり。爾が我に賜ひし榮光を我は彼等に與へたり、我儕が一なるが如く、彼等の一ならん爲なり、我は彼等に在り、爾は我に在り、是れ彼等が一に全からん爲、亦世をして爾が我を遣はしたまひしと、爾が我を愛する如く、彼等を愛したまへることを知らしめん爲なり。父よ、我は我の在る所に爾の我に授けたま

ひし者等も亦我と偕に在らんことを欲す、然らば彼等は爾が世界の創始の前より我を愛したまふによりて、我に賜ひしわが榮光を見るであらう。あゝ、義き父よ、世は爾を知らず、されど我は爾を知りまつれり、此等も亦爾が我を遣はしたまへるを知れり、我は爾の名を彼等に知らせたり、また知らせん、爾が我を愛したまへる愛、彼等にあり、且つ我は彼等にあらん。

(*) 基督を賣りし弟子のニダ。
キリスト

第十八章 聖靈

約十四〇
十六〇

我は父に請ふであらう、彼は他の保惠師(扶助者)を爾曹に與へ、之れをして爾曹と偕に永遠に止まらしめたまふであらう、是は真理の靈である。

約十四〇
廿六〇

我が名によつて父が遣はしたまふ保惠師(扶助者)即ち聖靈は一切のことを爾曹に教へ、且つわが爾曹に語りしことを記憶せしむるであらう。

約十五〇
廿六〇

父(の所)より我が遣はさんとする保惠師(扶助者)、即ち父より出づる真理の靈の來る時、彼は我が爲に證するであ

らう。

約七十六、
三十一、
五。

我が去往さりゆは爾曹なんぢらの益えきである、若し我去往さりゆかぬならば保惠師ほけいし(扶助者)は爾曹なんぢらに來らぬであらう、然し我去往さりゆかば我は彼を爾曹なんぢらに送るであらう。……彼、真理の靈が來る時は爾曹を凡ての眞理に導かん、蓋は彼は自ら擅しんにいふのでなく、彼は聞く所を語り、又來らんとする事實を爾曹に告ぐるであらう。彼は我を榮め、彼は我の(もの)を受け、爾曹に告ぐるであらう。父の有ちたまふものは皆我の(もの)である、故に彼が我の(もの)を受けて、之れを爾曹に告ぐるといふのである。

徒一〇五、
七、八。

爾曹は久しからぬうちに聖靈をもてバプテスマを受くるのである。……爾曹は父が其の權能の中にて定めたまふた時と期とを知る限でない。然し聖靈が爾曹に臨む時、爾曹は能力を受け、エルサレム、全ユダヤ、サマリヤ又地の極に我が證者となるのである。

而して彼等使徒等は一處に集まつて居つた。俄然強風の過ぐるが如き響、天から來つて彼等が坐して居つた家に充ちた。焔の如くに岐れた舌が現れ、彼等各人の上に止まつた。彼等は皆聖靈に充たされ、聖靈が彼等にいはしめたので他の舌(他國の語)をもて語りはじめたの

である。(徒二〇一―四)。

若し我儕の心が自ら責むることかなければ我儕は神に對して憚ることは無い、凡て我儕の請ふ所は我儕のならず彼より受くる、そは我儕彼の誠命を守りて、其の前に悦びたまふことを行ふからである。此れは彼の誠命である、即ち我儕其の子耶穌、基督の名を信じ、彼の授けたまひし誠命の如く、互に愛することである。彼の誠命を守る者は彼に居り、又彼は彼に居る。且つ彼の我儕に授けたまひし靈によつて我儕は彼が我儕に居たまふことを知るのである。(壹約三〇廿一―廿四、ヨハ子の語)。

第十九章 福音の傳播

(5) 芥子種

神の國は人が取つて畑に播く芥子種に似て居る、こは凡ての種よりも小くあるが、其の成長する時は草よりも大く、空の鳥が来て、其の枝に棲むほどの樹となる。
(*) 猶太の國の芥子は木の如く大くなる。

(5) 麴醗

一十三冊一〇
可四〇冊
路十三〇

太十三
路十三
一廿三
廿〇

神の國は婦人が取つて、三斗の粉の中に藏せば悉く之れを脹發らするに至る麪酵の如くである。

(は) 約束

約十二
卅二〇

我、若し我地より擧げらるゝならば一切の人を我に引附くるであらう。

路廿四
四十六
四十七

是く記されてある、かく基督は苦難を受け、第三日に死者の中より甦る、而して彼の名によつて悔改と罪の赦宥はエルサレムより始まり、萬國民に宣傳へらるゝ。

太廿八
卅九

爾曹往き、聖父と聖子と聖靈との名によつてバプテスマを施し、我が凡て爾曹に命せしことを守れと教へて、萬國民を弟子とせよ、且つ視よ、我は世の終末まで恒に爾曹と偕に居る。

太十八
廿〇

二人或は三人我が名によつて集まる所には我も彼等の中に居る。

約十三
卅〇
太十
卅四
可九
卅七
路九
十八

我が遣はした者を受くる者は我を受け、我を受くる者は我を遣はしたまふ者を受くるのである。

路十〇十
六〇

爾曹に聞く者は我に聞き、爾曹を受くる者は我を受け、
我を侮る者は我を遣はしたまひし者を侮るのである。

路十三〇
廿九

彼等は東と西とより、又北と南とより來つて神の國に
坐する。

太廿四〇
可十三〇

天の國の此の福音は萬國民に證として、徧く天下に宣
傳へらる、其の時終末が來るのである。

基督の教訓終

明治三十九年九月五日印刷

明治三十九年九月六日發行

静岡縣三島町千五百五十五番地

譯者 三 浦 徹

東京市赤坂區水川町五番地

發行者 ショーシ、プレスウエイト

東京市京橋區弓町二十四番地

印刷者 久米川 治三郎

東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷合資會社



發行所

東京市麹町區有樂町
二丁目三番地

基督教書類會社

福音史	定價	一圓廿錢	郵稅	十五錢
須氏基督傳	同	十五錢	同	四錢
基督教證據論	同	十五錢	同	四錢
基督教の由來	同上製	八十五錢	同	各四錢
基督教を信する理由	同上製	三十錢	同	六錢
基督信徒は何を信する乎	同上製	十二錢	同	四錢
神なる靈的生涯	同	十錢	同	二錢
イエスに從へ	同	六錢	同	二錢
基督に居れ	同	四十錢	同	六錢
基督の品性	同	十錢	同	四錢
新約入門	同上製	三十錢	同	六錢
右之外基督教に關する内外書籍澤山取揃有之候間御注文被成下度猶ほ	同並製	十二錢	同	四錢
目錄御入用の方へは御一報次第送呈可仕候				

東京市麹町區有樂町
二丁目三番地

基督教書類會社

